

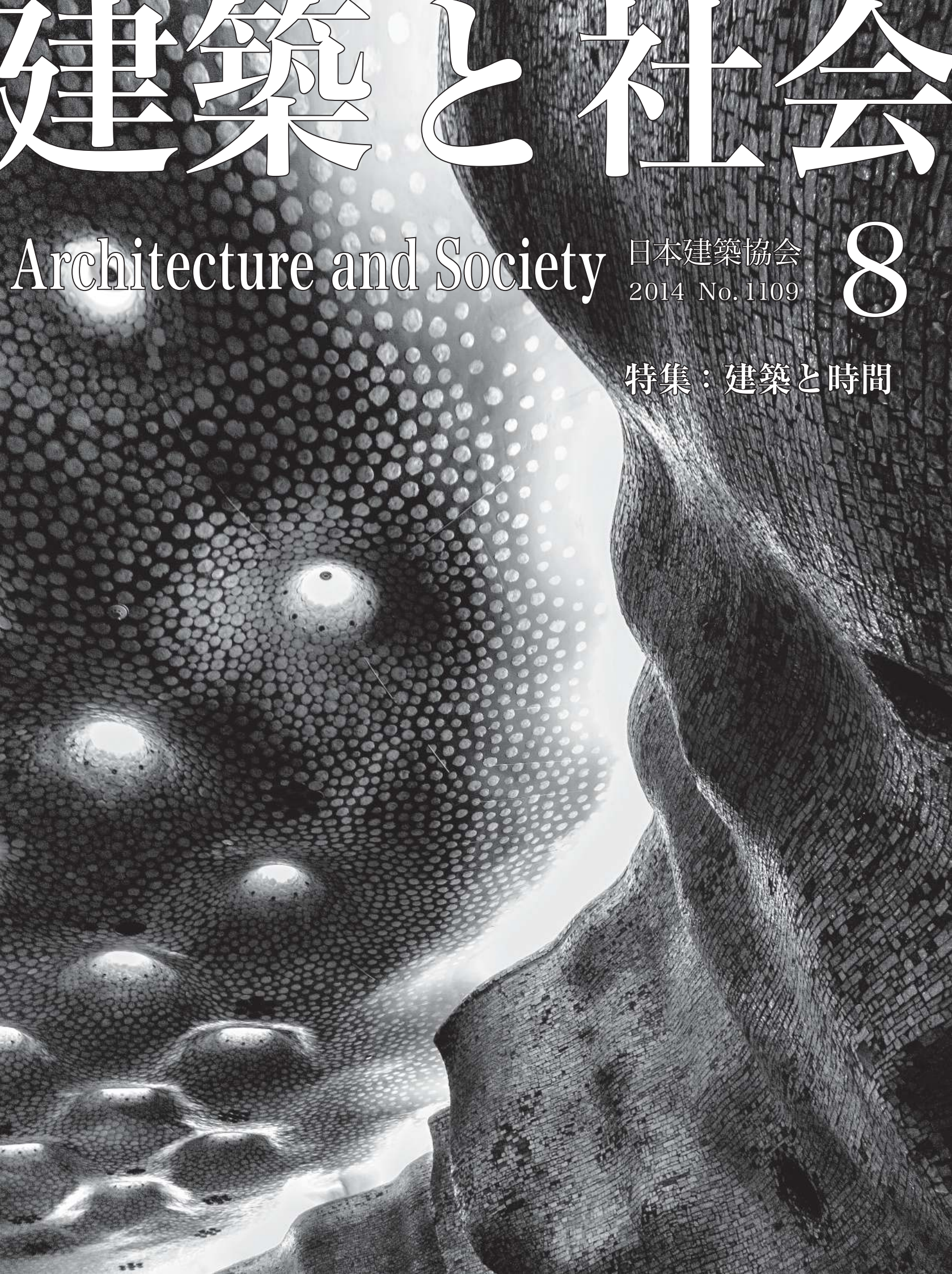
建築と社会

Architecture and Society

日本建築協会
2014 No.1109

8

特集：建築と時間



NHK新京都放送会館見学会

この見学会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。

(公社)大阪府建築士会 (3単位)

(公社)日本建築家協会 (3単位)

●建築概要

所在地 京都市中京区烏丸御池下
ル虎屋町574他
建築主 日本放送協会
設計 株式会社 東畑建築事務所
施工 株式会社 大林組
敷地面積 2,264.26㎡
建築面積 1,777.99㎡
延べ面積 6,755.99㎡
構造規模 S造+RC造 免震構造
竣工 2014年8月末(建物本体)
建物用途 放送局

二条城の北側に建つ現在のNHK京都放送会館は、老朽化が進み、放送技術の進歩に伴う様々な変化に対応することが困難になっている。建替計画に際しては、最新の放送機能を維持するとともに、視聴者に開かれ、周辺環境に配慮した、地域に根差す施設づくりが求められた。

烏丸通に面した計画地は、御池・三条通に近い文化ゾーンに位置しており、エントランスホールには公開収録等に対応した公開スペースを設け、地域の人を呼び込む開かれた構成としている。地下駐車場に利用した柱頭免震方式の免震構造のほか、電力・通信等インフラの多重化、防災井戸の設置等、大災害時にも確実に放送を出し続けられる防災性能を備える。

京都議定書のまちに建つ公共放送局舎として、太陽光発電パネルの設置など従来取り組まれてきた省エネルギー技術のほか、横引き光ダクトや、ダブルスキンの煙突効果を利用した室内の熱気を排出する換気システムなど、新たな環境配慮技術を導入することにより、CASBEE京都一新築におけるSランクを取得している。

また、本計画では31m規制の高度地区内に制限高さを超える鉄塔を設けており、京都市美観風致審議会による、外

観デザインを含めた特例認定を受けている。密度の高い「線」とそれらが創る「陰影」により構成された奥行感のあるファサードにより京都らしさを追求しながら、スカイラインや鉄塔デザインにも配慮し、周辺景観との調和を図っている。

古都の景観法の意味するところを見定め、将来にわたる京都の都心景観を先導する建築を目指している。

(中村文紀、三宗知之／東畑建築事務所)

日時 2014年8月25日(月)

14:00~16:30(予定)

講師 三宗知之

(株式会社 東畑建築事務所)

集合 現地(京都市営地下鉄烏丸線「烏丸御池駅」下車)

定員 30名・先着順

参加費 会員1,500円、一般2,500円
学生1,000円

申込方法 FAXまたはEメールで、

①催し名

「NHK新京都放送会館」

②氏名

③会員・一般の種別

④職場名または学校名

⑤参加証送付先

⑥連絡先電話番号

⑦CPDを申請される方は、申請先の団体名とIDを明記

申込先 (一社)日本建築協会

(担当:塩谷)

TEL.06-6946-6981

FAX.06-6946-6984

E-mail:hensyu@aaj.or.jp

締切日 2014年8月18日(月)



稲盛記念会館見学会

この見学会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。

(公社)大阪府建築士会 (2単位)

(公社)日本建築家協会 (2単位)



●建築概要

所在地 京都市左京区下鴨半木町
1-5 他
建築主 京都府
設計 株式会社久米設計
大阪支社
施工 松村・中川・平和特定建設
工事共同企業体
敷地面積 117,023.86㎡
延床面積 9,088.74㎡
構造規模 RC造
竣工 2014年6月末
建物用途 大学

稲盛記念会館は、京都府立大学、京都府立医科大学、京都工芸繊維大学の三大学の教養教育を共同で実施する施設で、授業の選択幅を広げ、大学を超えた幅広い人間関係の構築に期待している。敷地は、府立植物園、府立総合資料館、京都コンサートホール、陶板名画の庭などが立地する「北山文化環境ゾーン」の一角に位置する。北山通から南に向かって整備予定のプロムナードを挟んで、稲盛記念会館と(仮称)新総合資料館(建設中)が配置されるため、敷地は南北に細長くなった。また隣接する府立植物園から比叡山の眺望を阻害しないよう、建物高さを低く抑えつつ、100人~200人が利用できる大空間を確保する必要があった。

まず階高を抑えながら天井高を確保するために、床はPcaPCのT型床版(ST床版)を採用し、梁のない14mを超える大スパンの空間を実現した。建物中央部で水平力を負担し、東西外周部のPcaPC柱は軸力のみを負担させることで、200mm×800mmのルーバー状の細柱とした。ST床版と細柱は、現場緊張による圧着接合とし、外周部の梁を無くし、開放的なペリメーター空間としている。南北に長い外壁に沿って1間ピッチに並べた縦格子状の細柱は、東日・西日を、最上階に設けた

1丈(約3m)の大庇は高い高度の日差しを遮り、両者を組み合わせることで、繊細で深みのある京都の町並に馴染む佇まいとした。

平面計画は、古来より京の町を構成する大路・小路・路地にならい、プロムナード、エントランスホール、大廊下へとスケールを縮小しながら、両側に講義室、実験室、研究室を配した構成としている。エントランスホールは、西側に開いて隣接する植物園の緑を取り込み、軽やかに浮かぶトラス階段により上下階を繋ぎ、各階の幅2間半の大廊下へと導く。大廊下には「たまり」や「吹抜」を点在させ、講義室、実習・研究室の出入口は内部が垣間見れるガラス張りとし、上下・水平方向に視線を通し、昔ながらの路地空間のように自然とふれ合いを誘発する交流の場を目指した。

「吹抜」は自然換気と自然採光を誘因する「エコボイド」としても機能する。太陽光発電、雨水・井水利用、地中熱利用、床吹出空調、デシカント空調、照明・換気の自動制御などその他の省エネ手法を多数取り入れ、京都議定書の町にふさわしい建物とした。

(木下卓哉、沼田典久／

株式会社久米設計大阪支社)

日時 2014年9月17日(水)

14:00~16:00(予定)

講師 沼田典久 奥野親正 山田大祐

集合 現地・1F 104号室

定員 40名(申込先着順)

参加費 会員1,500円、一般2,500円

学生1,000円

申込方法 FAXまたはEメールで、

①催し名「稲盛記念会館見学会」

②氏名

③会員・一般の種別

④職場名または学校名

⑤参加証送付先

⑥連絡先電話番号

⑦CPDを申請される方は、申請先の団体名とIDを明記

申込先 (一社)日本建築協会(担当:塩谷)

TEL.06-6946-6981

FAX.06-6946-6984

E-mail:hensyu@aaj.or.jp

締切日 2014年9月10日(水)



建築と社会

Architecture and Society

8 | NO.1109 | 2014

日本建築協会

■特集予告

●9月号／省エネ・低炭素のこれまでとこれから

●10月号／複雑・高度化する建築とその施工技術について

| 今月の表紙

日生劇場 (日本生命日比谷ビル)

設計：村野藤吾
竣工：1963年
所在地：東京都千代田区



浜口隆一が「骨でも皮でもない果肉の感じ」と外観を表して射る。理論的にでなく、ここそこが自然な感覚に訴えかけてくる。凝固寸前のゾルのような天井も、ぬっと滴り落ちそうな部分にかけて貝が密になり、重力に従う。取り替えられたものもあるという貝は所々きらりと光る。妙に細い手摺は暗闇を走る光の残像のよう。村野の奥底からうねり出た天然の何かが結実したような作品。

(東畑建築事務所／大西広朗)

撮影(表紙)

東出尚子(東出清彦写真事務所)

デザイン・撮影(目次)

嘉村知紀(東出清彦写真事務所)

J o u r n a l o f t h e A r c h i t e c t u r a l A s s o c i a t i o n o f J a p a n

特集●建築と時間

【総論】

建築と時間●内藤 廣 8

【各論】

1 建築の論に時間を問う●岸田省吾 12

2 日本建築という永遠の現在●土居義岳 14

3 25年 100年 1000年●中谷礼仁 16

4 短命建築の教訓 つくり手の自己満足で建物に残らない
●瀬川 滋 18

5 テート・モダンに学ぶ過去と未来をつなぐことの意味
●松隈 洋 20

6 人と人をつなぐもの ～未来に続く場所へ～●陶器浩一 22

7 「おもてなし」と「もてなし」●東 利恵 24

【編集後記】 26

会告 NHK新京都放送会館見学会
稲盛記念会館見学会

作品作風 大阪府立精神医療センター 2
神戸海星女子学院中学校・高等学校 4

gallery 暮らしをつなぐ住まい●所 千夏 6

法令コーナー 歴史的資源を活かした魅力あるまちづくり 27
一斑鳩町歴史的風致維持向上計画●柳井孝一郎

設備の頁 大阪府立大学の新世代植物工場●小倉東一・福田弘和 28

再読 滋賀県庁舎●桐浴邦夫 29

関西近代建築

関西の建築界 荻野寿也●岡村吉展 33
群像

information 特別展 ギヤマン展ーあこがれの輸入ガラスと日本ー. 34
阪神・淡路大震災20年展 宝塚歌劇100周年記念 宝塚
歌劇100年展ー夢、かがやきつづけてー. デュフィ展. 2014
イタリア・ボローニャ国際絵本原画展. 宇宙兄弟展. 特別
展 こども展 名画にみるこどもと画家の絆. 医療福祉建
築賞2014 募集

月間の動き 平成26年 6 月 36



総合受付
General Reception

事業主 地方独立行政法人 大阪府立病院機構
設計・監理 安井建築設計事務所
施工 戸田建設

大阪府立精神医療センター

地域に開かれた精神科病院をめざして

大阪府枚方市は『精神衛生都市』を宣言している。今回の建替えにより、さらに地域との連携を強化し、開かれた精神科病院としての発展に寄与することをめざして計画を行なった。

敷地を囲んでいた万代堀を撤去し、開放的な植栽帯を設けた。市民も参加する祭りへの利用を意識し、中央待合、体育館と連携できるパティオを計画した。市民参加のセミナー等を開催できる大会議室等も設置している。

普通のことを普通にできる環境づくり

精神科の入院患者はあらゆることを制限された環境で生活をおくっている。そこで安全を確保した上で、より日常に近い環境を提供することを重視して計画を行なった。

配置計画としては、成人、児童・思春期、医療観察それぞれの外来・入院患者が安心して治療を行えるよう、患者の利用する施設を分棟化し、共用施設は各棟の中間に配置することで各患者の動線分離を徹底した。

成人病棟では、閉鎖病棟においても風や光を感じることのできるテラスを設置。保護室においては扉を設置した便所、日射を遮蔽できるブラインド内蔵サッシ等を設置した。

児童思春期病棟では、中庭を中心として病室を配置し、安全に外遊びのできる環境を実現した。病室は1床室と2床室を雁行して計画し、全てのベッドに個別の窓を配置し、さらにベッドサイドで勉強や読書などができるプライベート空間を提供している。

アートのある療養環境の実現

今回計画では、患者だけでなく来訪者全ての心を癒す環境づくりをめざし、空間と一体化したアートを設置している。様々な年齢層・状態の患者が利用する施設であるため、それぞれに適したアート計画について臨床心理士をはじめとしたスタッフと協議を重ねて計画を行なった。雰囲気づくりだけでなく治療に寄与できることを期待している。

(寺岡宏治・中原岳夫・中村篤史・南野優子・清原健史／安井建築設計事務所)

所在地——大阪府枚方市宮之阪3-16-21

敷地面積——84,842.37㎡

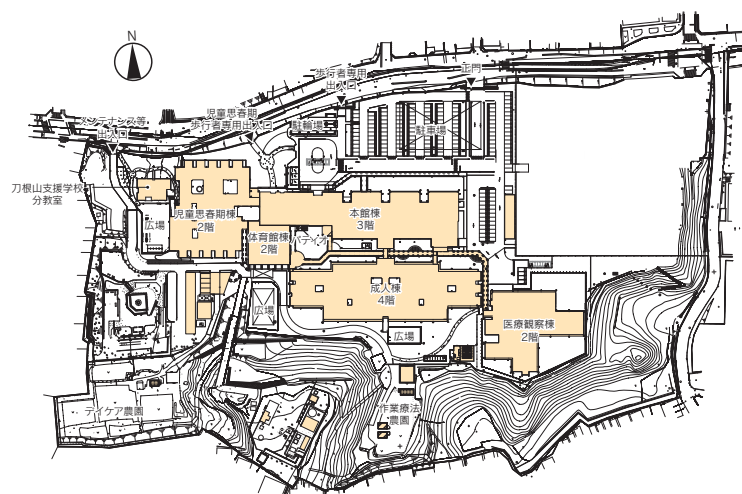
建築面積——14,756.11㎡

延床面積——30,491.06㎡

構造規模——RC造（一部S造）、地上4階

工期——2010年10月～2013年12月

撮影——藪内正直（伸和）



配置図



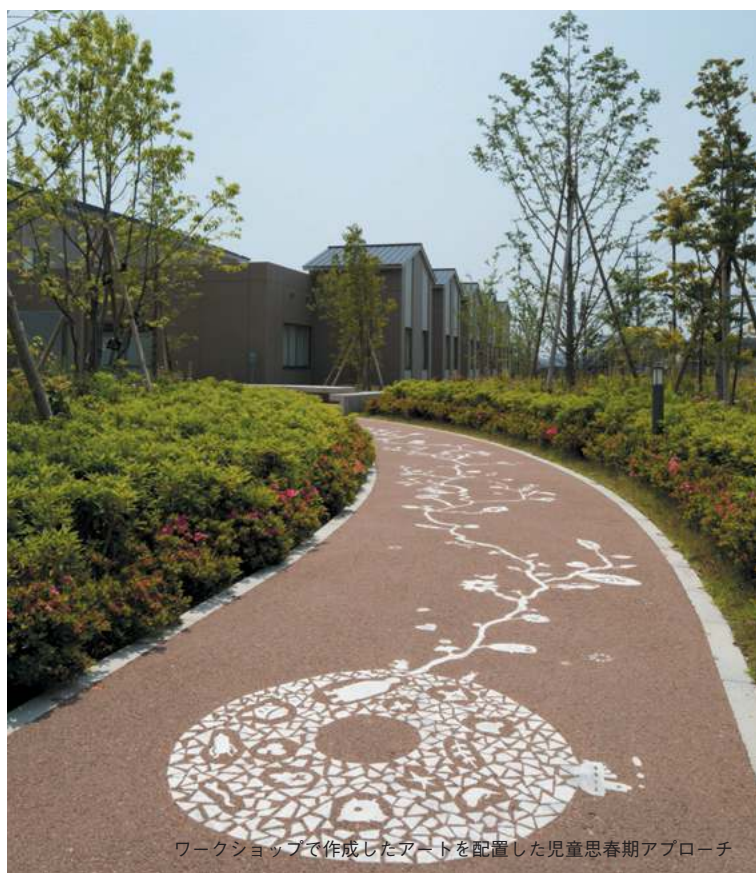
分節化し、ヒューマンスケールに計画した本館棟



各棟の中心に配置したパティオ



小さな家をイメージした児童思春期病棟



ワークショップで作成したアートを配置した児童思春期アプローチ

所在地——神戸市灘区青谷町2丁目
敷地面積——31,087.03㎡
建築面積——506.06㎡（図書館棟改築）、1,173.86㎡（中高棟改修）、8,546.48㎡（全体）
延床面積——1,919.45㎡（図書館棟改築）、4,394.39㎡（中高棟改修）、29,276.92㎡（全体）
構造規模——RC造、地上4階（図書館棟改築）、RC造（一部S造）、地上4階（中高棟改修）
工期——2013年5月～2014年3月
最寄駅——灘駅
撮影——母倉知樹：道下和亮（右上、右中上）



図書館棟および中高棟西側外観：マリア像を頂く伝統の中高棟と、改築した4階建て図書館棟による一体感のあるキャンパス景観

神戸海星女子学院中学校・高等学校

キリスト教精神を教育の基礎におく女子中高一貫校の改築と改修である。本校のキャンパス景観は、昭和27年、マリア像を頂く中高棟が竣工して以来、多くの学校関係者にとって思い出深い学び舎として受け継がれてきた。この景観の継承、耐震性の確保、教育施設の充実が本計画の目的である。図書館棟は、キャンパス景観と調和する外観とし、将来の自由度の高いフラットスラブ構造、アンダーフロア空調等、最新の構造・設備を備えた校舎として改築した。中高棟は校舎を使いながらの補強工事のため、外郭耐震フレームを中心とした耐震改修とし、既存外装のプロポーションとディテールを再現したRC造補強とした。

(竹中工務店／坂口武司)

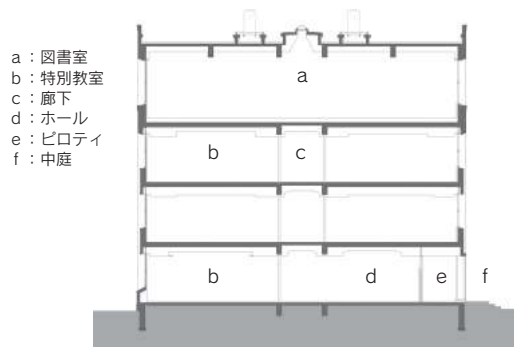


中高棟南側外観：既存外壁に増し打ちされた、既存意匠を尊重した耐震補強構造体



中高棟耐震補強模式図：
通常用いられるV・X型補強では外観イメージが大きく変わるため、既存外壁のプロポーションとディテールを慎重に再現したRC水平垂直部材補強を採用した

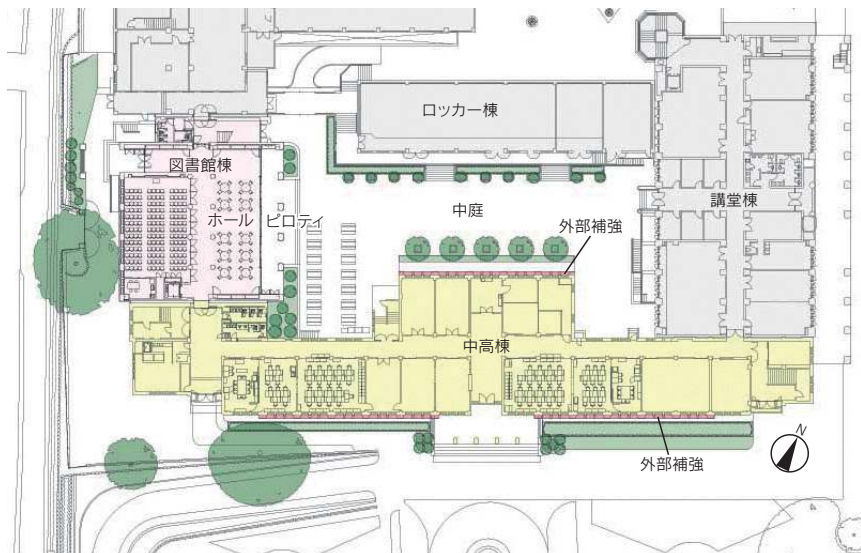
図書館棟断面図 S=1:500
配置図兼1階平面図 S=1:1000



中高棟ロビー：照明器具は、意匠はそのままに、白熱灯からLEDに交換



図書館棟ホール：生徒たちの居場所となるホール。開口幅7mの大型引戸サッシを開放すると、ホール、ピロティ、中庭の連続した屋内外空間となる



図書館棟 図書室：トブライトからの自然光と、既存校舎の器具の意匠を引用したグローブ照明による柔らかな照明計画。



くらしをつなぐ住まい NEXT21「住み継ぎの家」の設計を通して

設計

所 千夏

住宅を設計する時、意識しておきたいことのひとつに、その住宅が住まい手のくらしを「つなぐ(=継承する)」住まいになっているかどうか、ということがある。

住まいが新しくなっても、住まい手が持つDNAに響く「何か」が住まいの中に埋め込まれていること。要はそれだけだ。

住まい手が、ほっとする空間になっているとか、何かなつかしく感じるとか住まい手の気持ちに響くものを住まいに埋め込んでおきたいのだ。

ここに紹介する大阪ガス実験集合住宅NEXT21-304住戸の改修プロジェクト。201住戸に引き続いて、荒木公樹氏と共同で設計したプロジェクトである。1994年に居住実験を開始してから17年経過した2011年、新しい次世代住環境のあり方を模索し、提案したのがこのNEXT21-304住戸「住み継ぎの家」である。

「住み継ぎの家」の設計では、様々な「つなぐ」をしがけている。

まず住戸内と外をどう「つなぐ」か。高気密・高断熱のクラディング(外壁)に覆われたNEXT21の中で性能を保つつつゆるやかに住戸内外を「つなぐ」方法を模索した。その結果、防火性能をもつ最外部のガラス戸と、外部からの視線を柔らかくささげる格子戸、「環境調整空間」と名付けた土間空間を挟んでさらに内側に太鼓障子、と3枚の建具を設置し、生活のシーンによりそれらを開閉、空間を一体化したり分けたりすることで、住戸内外のゆるやかな「つなぐ」を実現した。

また、住戸内の部屋は壁で仕切らず建具や家具で仕切り、全体をワンルーム空間とした。住まい手が変わってもその建具や家具を動かして住み続けられる、新旧の住まい手のくらしを「つなぐ」設計となっている。

他にも、古建具や樺の違い棚を再利用し、どこか懐かしい衝立や収納棚を実現。時代を越えてくらしを「つなぐ」ことも考えた。

くらしの様々な切り口で「つなぐ」ことを強く意識した、このプロジェクトとの関わりは私にとって貴重な体験だった。今後も住まい手のくらしを様々な意味で「つなぐ」ことを意識して、設計に向き合いたいと考えている。

所 千夏 (ところ ちか)

1992 京都大学大学院修士課程修了

1992-2003 安井建築設計事務所

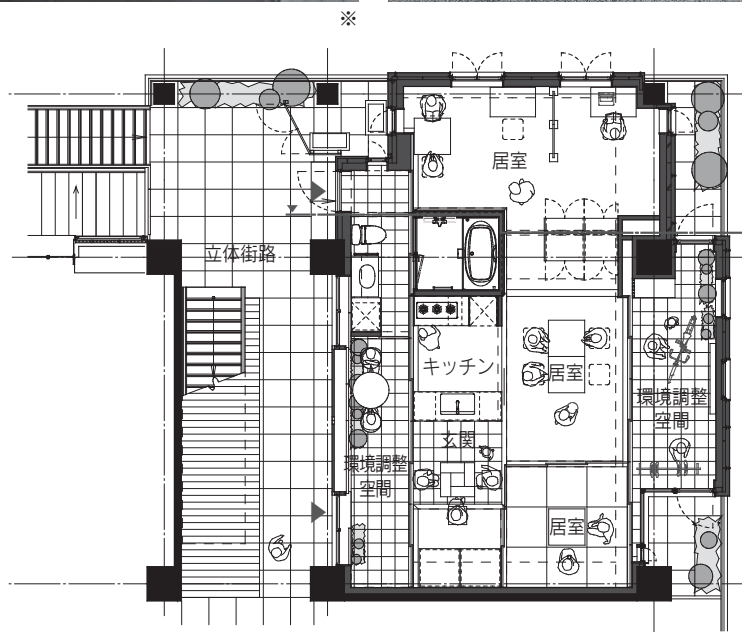
2004- アトリエCK 主宰

2005-2009 鳥取環境大学 非常勤講師

2014- 甲南女子大学 非常勤講師

撮影：フジタ写真工房 ※印は筆者撮影

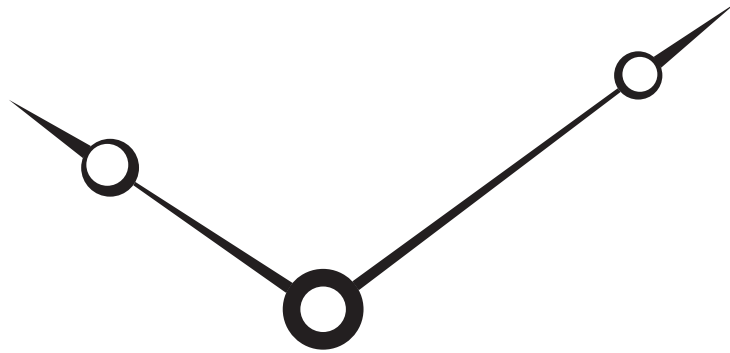
企画編集：倉渕奈千子(作品作風小委員会)



NEXT21-304住戸平面図



【特集】



建築と時間

建築は常に人間とともにあり、人間の過ごす時間とともにある。

長く愛され使われてきた建築には、使っていた人たちの想いが込められている。
街中から消えていく建築は、私たちが気付いていなかった時代の流れを教えてくれる。
時間が建築を劣化させていく一方で、風雨に耐えた建築が独特の陰影を身にまとうこともある。
日常生活を支えてくれる建築が、あるときには人生のかけがえのない瞬間を演出してくれる。

建築を「時間」というキーワードを通し、多角的にとらえることで、
これからの建築と社会、そして私たちのあるべきすがたを考えるきっかけとしたい。

編集委員 渡部 剛

【総論】

建築と時間

内藤 廣

【各論】

建築の論に時間を問う

岸田省吾

日本建築という永遠の現在

土居義岳

25年 100年 1000年

中谷礼仁

短命建築の教訓 つくり手の自己満足で建物は残らない

瀬川 滋

テート・モダンに学ぶ過去と未来をつなぐことの意味

松隈 洋

人と人とをつなぐもの ～未来に続く場所へ～

陶器浩一

「おもてなし」と「もてなし」

東 利恵

【編集後記】

企画 建築計画系分科会

建築と時間

建築家
東京大学名誉教授

内藤 廣

1950年横浜市生まれ。
1976年早稲田大学大学院修士課程修了。
フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所（スペイン）、菊竹清訓建築設計事務所を経て
1981年内藤廣建築設計事務所設立。
2001～2011年東京大学大学院にて、教授、副
学長を歴任。現在、東京大学名誉教授、総長
室顧問。
主な建築作品に、海の博物館、安曇野ひろ
美術館、牧野富太郎記念館、島根県芸術文化
センター、日向市駅、九州大学椎木講堂など
があり、日本建築学会作品賞、村野藤吾賞、
ブルネル賞など数々の賞も受賞している。
東日本大震災津波の発災以降、岩手県の復興
に向け各種委員会の委員を務めるほか、市町
村のまちづくり計画の策定支援に取り組んで
いる。

■時間という魔物

われわれは重層的な時間を受け入れ、それらを受け入れるチャンネルを切り替えながら日々を生きている。

身の回りにはさまざまな時間が紛れ込んでいる。一瞬、一日、一週間、季節の移り変わり、一年、そういう慌ただしい時間を、区切ったり切り替えたりして生きている。そして、ときたま自分の歳を思い出して、七十年前後という人生の時間に思いを馳せたりもする。さらに、世相の移り変わりや歴史を通して時代というより長い時間を思い浮かべたりもする。また、温暖化や自然の変化を通して地球の過ごしている悠久の時間に想いを馳せることもできる。

日常生活を眺めてみよう。家具には家具の過ごしている時間がある。家の外を眺めれば、庭には庭の時間がある。それを取り囲む隣近所には、その集団の時間があり、街には街の都市には都市の時間がある。さらに大きな自然には自然の時間がある。そして、これらの中間項に建築の時間がある、と考えることもできる。

あらためて考えてみると、われわれはこうやってさまざまな時間に取り囲まれて生きていることが分かる。ここまでは、誰もが了解するであろうごく平凡な時間に対する感想である。

これを建築に結びつけて論じることも出来るが、それではあまりに倫理的で修身のような論になってしまう。たとえば、建築にとって時間は重要であり、それ故、時間に耐えることこそが力を注ぐべき対象であり、かつてルイス・マンフォードが唱えたように社会資本の蓄積こそが使命であり、建築家には当然のことながらそのための規範が求められる。こんなところだろう。これはいかにも正しいけれど面白くない。このあたりに関しては、本項を読まれる方たちはすでに了解済みだろうから、あえて論ずるまでもない。

ここでは、可能な限りその枠組みを外れてみることを試みたい。

たとえば、われわれは日々、色々な情報に晒されて日常生活を送っている、と考えてみる。ツイッターをやり、メールを書き、TVを

見、新聞に目を通し、週刊誌を眺め、本を読む。それらのメディアは、それぞれ異なる時間の位相を持ち込んでくる。瞬く間に消えていく情報から、長く蓄積していく情報まで、これらを頭脳という限られたハードディスクに蓄積していかねばならない。これはなかなかたいへんだ。だから、それぞれ異なる耐久性、消滅するまでの時間割、すなわち時間の係数が被せられている。情報の質によって蓄積する仕方は異なる。

人は、すべてを記憶しては生きていけない。すべてのことを忘れずに記憶している、もしそんなことが可能な人が居たら、すぐに発狂してしまうだろう。オルダス・ハクスリーは、『知覚の扉』で、「人は視覚を中心とした自らの器官を、生存するために進化させてきたはずだ。だから、本当はわれわれはもっと多くの情報に取り囲まれて生きているはずで、日常に於いてそれらを捨象しているだけだ」、と説いている。

同じことが、身の回りに紛れ込む時間についても言える。さまざまな質の時間を切り替えながら、そして忘れながら、われわれは日常生活の時間を組み上げているのである。すなわち、われわれは必要な情報だけを取捨選択して、忘れながら生きている。その消去の仕方、すなわち忘れるための方法として、時間が深く関与していることは言うまでもない。

建築はいつも人の暮らしの傍に在る。だから、このように考えていくと、建築にまつわる時間の姿も見えてくる。

■雑多な時間の織物

建築もまたさまざまな時間を引き受けながら、あるときはそれを取捨選択し、組み合わせ、あるときは忘れ、ひとつの時間を生み出している。

素材を選ぶとき、ディテールを練り上げるとき、防水について考えるとき、建築家は同じ時間を相手にしているわけではない。多くの場合、その都度時間のことを思い浮かべるが、その時間の長短はバラバラだ。ものの軽重によって順番を付け、不要なものはうまく忘れていければよいのだが、忙しくなるとそれが難しくなる。そうなると、頭の中は散らかった部屋のようになってくる。コン

トロールできなくなっていく。多くの場合、無数の情報の集積である建築は、こうした状態を受け入れねばならない。

もし、建築を空間という尺度ではなく、時間という尺度で眺めることができたなら、その姿は混乱状態そのものだろう。

たとえば、アルミサッシそのものは百年以上そのままだろうが、パッキングのゴムが十分に性能を発揮しうるのは十年から二十年だろう。そのサッシと建物躯体と仕舞いをつけるのはコーキングだが、コーキングが期待どおりの性能を保持しうるのは十年がいいところだろう。建物は数百年耐えうような構えでも、シート防水が保証する耐久性は最大で数十年だ。このように、わたしたちは設計の中に無造作にこれらの時間を組み合わせ混在させている。

この状態を補完しているのが、人の手によるメンテナンスだ。時間係数が短い部位、すなわち耐用年限が短いところに手を入れて、建物全体の時間を担保しようとする。LCCが近年強く言われているのは、バラバラに組み上げられた時間を補完する方法だ。しかし、まったく別の考え方もある。

ヘンリー・フォードの逸話が残っている。T型フォードの車のある部品の不良が発覚したとき、その耐久性が問題になった。その時、その部品の耐久性を上げるのではなく、それに合わせて他の部品の耐久性を落とす、という決断をしたという。つまり、低い方に時間のオーダーを揃えたわけだ。あやしげな逸話だが、近代の生産システムの本質を突いている。つまり、時間に対する態度だ。時間を高度に計画に組み込めば、こういうことになる。より長い時間を求め、時間と共に価値が高くなっていく、などという建築の美德とは正反対のものの考え方だ。

もしも、近代建築、モダニズムという建築形式が、自動車ほど厳密な生産品であったなら、このような設定の仕方もあったろう。コルビュジェが「住宅は住むための機械」、とまで言い切ったのは、このような在り方を理想としたのだろう。そうなれば、建築の在り方も本当に自動車に近いものになったかも知れない。設定された所定の時間が経過すると、建物が一気に壊れる。使い物にならなくなる。

そのような建物で出来た都市や風景を思い浮かべることは、それはそれで楽しい。建物が人と同じようにかなり正確に有限の時間に支配されていたのなら、街の新陳代謝をより計画的に組み上げることが出来るだろう。未来という時間を、より正確に計画の中にプログラムすることができるかもしれない。

しかし、残念ながらそうならないのは、建築は工業製品のように厳密ではないからだ。建築というのはきわめて曖昧な存在だ。文化や人の心理という不思議なマーケットを相手にしている。人は、住宅を手に入れるとき、マンションの住居を手に入れるとき、それを永遠のものと勘違いしがちだ。売り手は、あたかも永久普遍に存在するかのような像を描き出し、商品に仕立て上げ、貨幣価値に置き換えていく。時間の幻像を生みだし、幻の物語を捏造し、それを消費者に信じ込ませ、売りさばく。

端から冷静に見ていると、いかにも分かりやすい仕組みだ。供給する側が買い手を騙しているようにも見えるが、買い手も騙されたがっているようにも見える。真実などどうでもよい。創り出された物語の中に居ることが、手に入れた未来なのだ。それに金を払う。ディズニランドと同じだ。しかし、その夢を無下に否定する気にもならない。それは資本主義社会そのものの姿だと言ってもよいからである。時間捏造ゲームに乗るのか乗らないのか、資本主義の申し子である消費社会、とくに大衆消費の社会は、あらゆる局面でそれを問うてくるのである。

■白について・モダニズムの時間

もはや、近代建築はわれわれの身の回りを埋め尽くし、それによってわれわれも生かさず、日々設計している内容も、近代建築かどうかは別にして、近代的な技術によって生み出されたものにほとんど依存している。

それ以前のことを少し思い出してみよう。もともと建築は時間が顕現したのと考えられてきた。どんな人でも限られた時間しか生きられない。それ故、権力者は自らのモニュメントとして建物を建ててきたし、永遠の時間を想起させるものとして宗教施設を造ってきた。有限の存在である人の時間を超える術

として、特に権力者にとって、建築はそのためのほとんど唯一の手段として重宝されてきた。

近代建築の真の凄さは、これを否定したところにある。近代そのものが神を否定した軌跡に符合するように、近代建築は時間を否定したのである。それは父親を否定する青年の志のように、若々しく、輝かしく、情熱的で、可能性に満ちていた。これを新しい時代の新しい姿として、多くの人が受け入れたのである。それ以前の時代、建築にとって、大地は母であり時間は父であった。近代建築は、それを二つとも否定し去ったのである。ピロティは大地に縛られない建物の姿であり、白い建物は無時間を意味する。

近代建築にとって、足下にまわりついてくる大地は煩わしいだけの存在であり、時間のことを書くことはタブーだった。近代建築のテーゼを要約すれば、「時間（四次元）を無いものとすれば、空間（三次元）はこれほど自由になる」ということになる。そんなことは直接的には書かれていないが、注意深く見れば、近代建築が大地や時間に対して言及することを注意深く避けているのは誰の目にも明らかだ。

このあたりは、実に分かりやすい図式なのだが、20世紀はそのことを真剣に論じた形跡はない。時間についてはまるで言及されることはなかった。ということは、時間に対する意識こそがこの世紀の建築を巡る巨大な無意識だったということもできるのかもしれない。

このことは白い建物に象徴的に現れる。サボア邸、ファンズワース邸、20世紀モダニズムのシンボルだったこれらの建物は「白い」。ウエディングドレスがそうであるように、古今東西、白は汚れ無き純血や純粋さを表現する。しかし、白は次の瞬間から汚れていくのである。一日後、一年後、十年後、百年後、白は時間を刻みながら汚れていく。白は、塗り替え続けなければ、生まれた当初の価値を保持し得ない。白は白であり続けることはできない。その意味で、白を使うことは、時間を捨象することに他ならない。

■金利の時間

「建築の時間はどのように生み出されているのか、それは日銀の公定歩合である」、と突

拍子もないことを書いたことがある。バブル経済の最中のことだったと思う。当時、こんなばかげた言い草には誰も耳を傾けてくれなかった。しかし、この言葉は実感から発せられたものであって、なにも特異なことを言ったつもりはない。

公定歩合が上がれば、銀行の金利が上がる。そうすると、土地に貸し付けた、あるいは土地の担保を原資とした開発は、それだけ早く利益を回収しなければならなくなる。一月でも早く造る、一日でも早く造る、そして売る。プロジェクトを速く回せば回すほどそれだけ利益を得ることになる。建物は、投機対象だから、早く造るに越したことはないのである。

この状態が過剰なまになったのが、バブル経済の時期であることは言うまでもない。そして、建物それ自体も投機対象なのだから、すこしでも転売しやすいように、分かりやすい価値を求めるようになっていく。建物が異様な意匠を纏ったり、オーバージェスチャーな形態が主流になったのもそれ故である。建物の仕上げや形が無理をしていて、たとえば短い時間しか存在しなくても、そんなことは気にしない。転売しやすいければ、それでよいのである。建築を造る時間は、質を置き去りにして、あるいは金に飽かせて、そして、とんでもない無理をして短くなっていった。これは、あの時代の実感としていまだに脳裏に残っている。

時間の経過と共に価値が増していく、耐久性こそが建築の基本的な価値である、というような建築の在り方は、ばかげた前近代的な時代外れの考え方になっていった。建て主はそんなことは求めていなかったのである。すべては、時間が短い方が望ましい。短い方が利益を生む、したがって価値が高い、ということになった。そうして建物が生み出されてから過ごす時間も短くなっていく。

この時期、一世を風靡したポスト・モダニズムの建築言語は、この構図に誠にうまくはまっていた。建築は短期間の消費にかなう商品となり、売り買いできるものに変容し、建築的な価値は隅から隅まで消費されたのである。世の中の倫理的な土台も建築の時間も、元を正せばこのようにして日銀の公定歩合が決めている。もちろん、こんなバカげた世相

に抗う人たちもいる。どちらかといえばわたしもこうした趨勢に抗うタイプの建築家だが、世相とは外れているのでいきおい冷や飯を食うことになる。

それでは、金利が低くなれば、つまり世の中の回転速度が遅くなれば、インフレ傾向ではなくてデフレ傾向の社会であれば、建築の価値の在り方は良い方に向くのだろうか。人々の目は目先の分かりやすい価値から、遠くを眺めるような穏やかなものになるのだろうか。ところがそう単純にはいかない。身の回りの時間は、違った方面から、加速度的に短くなってきているからだ。

■デジタルな時間

世は情報革命の中にある。この傾向はあと数十年は続くと言われている。身の回りの時間は、どんどんデジタル化された時間に刻まれていく。1960年代にインテルの創業者の一人であるゴードン・ムーアは、コンピューターの処理能力は、18ヶ月で倍のスピードで進化していくと予想を立てた。これはなんの根拠もない予想だったから、その後18ヶ月は14ヶ月になったり何回か修正されたが、このゴードン・ムーアの法則は、大勢としていまだに命脈を保っている。それどころか加速すらしている。

アメリカの科学評論家のカーツワイルは、これに収獲加速なるものを被せて、2045年問題を提唱している。この年、すなわち30年後には、人類の頭脳すべてを合わせたより多くの記憶素子を持ったコンピューターが現れるというのである。夢のような、否、悪夢のような話だが、いまや奇妙に現実味を帯びてきているところがおそろしい。

仮に一年に倍のスピードで進化するとしたら、一年目には2の1乗、十年目には2の10乗、三十年目には2の30乗倍の進化となる。2の30乗倍とは、10億倍ということになる。今現在皆さんの手元にあるコンピューターに34年かかる演算を入力したとして、それが一秒で答えが出る、という能力である。こう考えれば、カーツワイルの言っていることもリアルに思えてくる。

いずれにせよ、スマートフォン、メール、CG、BIM、現在、最新鋭の目新しい道具とし

て使われているものたちも、どんどん時代遅れのものとして陳腐化していくだろう。十年後ですらどうなっているか分らない。

人間は世代を重ねてゆっくりと進化してきた。問題は、この人間が生み出したコンピューターの進化スピードと人間の進化スピードがどんどん乖離していくということだ。数百万年をかけて進化してきた人間は、そうすぐには変わらない。「この乖離を日常生活において埋め合わせる役割」を担っているのが、デザインであり建築であり都市なのではないか。

身体を持つわれわれは、アナログで、不可逆的で、それも老いを伴う限られた時間を生きている。どんなに電脳化された未来でも、所詮、建築の役割は「身の置き所」を作る仕事であり続けるだろう。相手にしているのは、地球の自転によりもたらされる一日という時間であり、公転によってもたらされる季節である。また、地球の大きさによってもたらされる1Gという重力場にどのように抵抗するか、雨露を防ぎ、変化する空気環境からどのように36度前後の身体の温度を保つか、の形式であることに変わりはない。

■建築の時間

資本主義経済が生み出す「金利の時間」。情報化社会が生み出す「デジタルな時間」。建築をめぐる時間はこれらに切り刻まれていく。現代を生きる以上、これも仕方のないことである。

こうしたことを考えると、建築がかかわる原始的でアナログな時間という要素は、分が悪いように見える。しかし、よく考えてみれば、われわれは頭脳だけで生きているわけではない。脳は体の上に載っかっているのである。どんな電脳時代が訪れてこようと、身体を購う場所はそれだけ重みを増してくることが予想される。

身の回りはどんどんデジタルな時間で刻まれていくが、その一方で「身の置き所」はより重要さを増していくだろう。心は、身体とともにあるアナログな時間を求めていくはずだ。建築本来の価値は、太古より引き継いできた身体を購う場所として、より重要な役割を果たすことになるだろう。また、そうあってほしい。しかし、これは多分に希望が混

ざった楽観的な予測だから、外れる可能性も高い。

そのための準備として、わたしたちはわたしたちの中にある時間の記憶を再確認しておく必要がある。人それぞれ生きてきただけの時間の記憶がある。そして、それはそれぞれまったく違うものであるはずだ。建築家が、設計する建物の中に生み出す時間があるとすれば、それはその記憶を頼りに計画の中に再現していくしかないわけだから、建築家の最大の能力、もし才能と呼べるような種類の能力があるとしたら、それはその人の中に蓄積された時間のイメージの強度や質そのものにあるのではないかと思う。

グローバルに広がる資本主義と、つまり金がすべてという社会と、情報革命が生み出す電腦社会、それらが組み合わさって建築の時間を切り刻んでいく。建築の設計を突き詰めて見れば、それはつねに未来に向けて新たな時間を生み出そうとする力、ということができる。しかし、生み出せども生み出せども、生み落とされた瞬間から刻まれていく。それが今の現実なのではないかと思う。これは戦いなのだ。

あらゆる時間に対するセンサーを磨くこと、自らの内にある体験や記憶を、すなわち時間に対するコンテンツを、より強固なものに築き上げていくこと。それらが建築の設計により強く求められる時代になってきているのではないかと思う。このことをリアルに思い出させてくれたのが3.11である。

■三陸の時間、福島的时间

3.11という突然の事態を前にして、時間に関する意識を今一度取り戻さねばならない時代を生きているのではないかと思う。

冒頭で、「われわれは様々な重層的な時間を受け入れ、それらを受け入れるチャンネルを切り替えながら日々を生きている。」と書いた。これにはやや自嘲的な意味あいも含まれている。わたし自身、「慌ただしい時間を、区切ったり切り替えたりして生きている」わけだが、この身勝手な要領の良さに自己嫌悪に陥ることもある。切り替えてはいけない時間のチャンネルもある。

三陸に通う日々が続いている。あの地域で

は多くの街で、わずか十分ほどの間に、暮らしていた日常風景が根こそぎ失われた。「ある」という状態から「なにもない」状態へ変わったのである。失われたものを呼び覚ます手掛かりすら失われた。目の前にある風景のチャンネルが、突然切り替えられた。そうすると、頼りになるのは記憶だけである。無数の記憶がそれぞれの人の脳裏に浮かび上がる。それは目に見えない風景の壮大な集合体のようなものだ。言葉にならない叙事詩のようなものだ。昨日を思い出し、一年前を思い出し、さらには百年前を思い出す。その反芻の果てに、多くの人たちがこれからの未来を思い描こうとしている。

残念ながら、行政的に期限を切られている復興計画は、こうした思いを受け止める仕組みにはなっていない。少しでも思いを受け止めながら、それでも前に進まざるを得ない。とても及第点はもらえないだろう、という忸怩たる思いを復興に当たるほとんどの人が胸に抱きながら、少しでもましなものを、という気持ちで取り組んでいる。過去の時間、未来の時間、悠久の時間、さまざまな時間がつなぎ合わされず不連続で不整合なまま散在している。この現状にはかなりつらいものがある。

だからといって、チャンネルを切り替えてはいけない。あきらめたら終わりだ。頭の中に立ち上がった無数の記憶は、これからやってくる未来の時間のなかに融け合っていくはずだ、という想像力を持ち続けるべきだろう。復興はこれから徐々に建築へと移っていく。個々の住宅、さまざまな施設、それらは新たな時間の発生装置だと考えることが出来る。だからその在り方は、現実から切り離されたものであってはならない。あるいは過去や未来の時間から切り離されたディズニーランドのようなものであってほしくない。そう願っている。

福島では、目の前に日常の街があるのに、そこに住むことが出来ない、という三陸とは異なる失われ方をしている。このつらさは想像を絶する。「ある」のに、人間だけが取り除かれている。その街での暮らしを思い出す手掛かりは有り余るほどあるのに、思い出す主体だけが理不尽にもその未来に関与できない。

つまり、未来の時間を紡ぎ出すことを拒否されているのである。

おそらく、空間の参与から拒否されるより、時間の参与から拒否されることの方が厳しい。三陸では、街という具体的な空間が災害によって奪われた。しかし、そこには未来の時間を構築するという時間への参与が許されている。福島では、空間はそのまま「ある」にもかかわらず、これからの時間への参与が拒否されている。退去を命じられた方たちは、目の前に暮らしの手掛かりがあるのだから、容易に時間のチャンネルを切り替えることなど出来ない。

時間について、これから学ぶことは多い。

建築は長い間、近代という仕組み、資本主義と消費社会という仕組み、高度情報化社会という仕組み、これらに流され、果ては組み敷かれてきたと言ってもよい。これらのどれもが、時間を疎外する構造を持っている。

したがって、時間を建築の中に取り込もうとすることは、先に述べた仕組みやそれに裏打ちされた社会制度すべてを相手にして戦わざるを得ないことになる。これは直接関わっている三陸の復興の果てしなく続く負け戦から、日々わたしが学んでいることである。

時間を旗印にするとしたら、完全にとまでは言わないが、それはかなりの程度、近代を否定することであり、資本主義と消費社会を否定することであり、情報化社会をも否定することでもある。ときには国という仕組みをも否定することにもなる。

それを知った上で、それが未来に向けた壮大な試みであるのなら、要領よくチャンネルを切り替えないという覚悟があるのなら、時間を設計の正面に据える試みは是としたい。そこに新しい時代の建築像や建築家像が生まれるのかも知れないからだ。

(ないとう ひろし)

建築の論に 時間を問う

建築家
東京大学名誉教授

岸田省吾

1951年 東京生まれ
1980年 東京大学大学院博士課程修了
1991年 岡田新一設計事務所、磯崎新アトリエを経て東京大学助教授
2005年 東京大学教授
2012年 (株)岸田建築設計事務所代表
東京大学名誉教授、同特任教授

作品 東京大学小石川博物館(01)、武田先端知ビル(03)、阿音の家(03)、行徳メディカルプラザ(06)、山中湖内藤セミナーハウス(09) 他
著作 「建築意匠論」(丸善)、「大学の空間から建築の時空へ」(鹿島出版会)、「建築の「私たち」と「デザイン」」(鹿島出版会)、「パルセロナー地中海都市の存在証明」(丸善) 他

建築をめぐって時間という視点がもたらす意味は想像以上に広く深い。ここでは八つの言葉を手がかりに建築における時間論を振り返ってみよう。

■律動

建築で時間性が意識されるのは音楽と比較された場合であろう。シュレーゲルあるいはシェリングの箴言「建築は凍れる音楽であり、音楽は解凍せられる建築である」はよく知られている。その含みのある表現からゲーテお気に入りの言葉になったが、一方こうした説明は何にもならないと酷評するヘルマン・ゼルゲルのような人もいる（『建築美学』'21、吉岡健二郎訳 '03）。

決定的であったのはルードヴィヒ・クラークスによるリズム論である（『リズムの本質』'33、杉浦実訳'71）。時間と空間が運動体験を通し結び付けられるというクラークスの体験に裏付けられた指摘によって古い箴言の輝きが蘇る。クラークスは、リズムが音楽、建築を含めた森羅万象を貫通し人間存在に繋がるような現象、時間と空間を結ぶ根源的現象として体験できることを明らかにした。

■散策路

ル・コルビュジェはそのキャリアの早い段階で建築における時間性的問題を見据えていた。サヴォア邸（'29）で言及される「建築的散策路（プロムナード）」とは彼の捉えた建築の時間である。コルブは勃興し始めた映画に注目し、視点移動に伴って次々と光景が展開するような映画の経験を建築で実践しようとした。設計のプロセスで残されたスケッチを見ても様々な視点から捉えた光景を綴るとともに遠景から細部の近接視まで焦点も瞬時に入れ替わる。コルブはごく初期から身体の運動を通し現れる建築の経験の真髄を捉え、制作にあたって身体と視線の運動を想像しつつ空間の構想を練り上げた。その後この「散策路」は様々な形を変え現れる。レムの言う歷程（トラジェクトリー）もその一つであろう。

■時空間

ジークフリート・ギーディオンはCIAMの書記として近代建築の普及に務め、「空間・時

間・建築」（'41、太田実訳'69）で近代建築が時空間という新時代の新しい視点を開くものであると説いた。ギーディオンの時空間とは空間の三次元に時間次元を加えた四次元空間をいうものであって、20世紀初頭、都市や建築、絵画など芸術や科学を横断し多発的に起こった変化に通底する視点と捉えられた。当然コルブ、グロピウスら近代建築のパイオニアたちの仕事もとりあげるが、時空間論の例証という扱いに近い。

ギーディオンの時空間論はミンコフスキーの時空間とどのような関係にあるか議論は深められていないが、光速の運動体では時間が消えるという物理学的時空間論と建築に現れる時空間の関係をあれこれ詮索するより、一点から空間を捉えるルネサンス的な視点に代わって多視点と視点移動の登場を指摘したことのほうが遥かに意味があった。実際それ以前とは比較にならないほど膨大な数の人、物、情報が行き交い始め、確かに移動しつつ様々に視点を動かさない限りとうてい理解できないような巨大で複雑な世界が出現しつつあった。

■経験

ギーディオンの時空間は新しい物理学の知見を無批判に適用し建築の経験とは乖離していた。その隔たりを埋め議論を深めたのがブルーノ・ゼヴィである。ゼヴィは建築固有の力を時間という視点から問い、建築の根源として人間がその中を動き回り自身で四次元を作り出し、そこに現実性をあたえるような内部空間の生成を考える（『空間としての建築』'48、栗田勇訳'66）。建築は人が自ら時間をかけ運動し身体を介し経験することによって理解できる何かとなる。

科学と哲学を横断する時空間論では「時間の実在」は否定されるも未来や過去といった時間経験は存在する。時間経験はまた人間の「今一現在」の経験から始まり、時々「今一現在」が重層し記録されることによって過去から未来に繋がる連続的な意識が生まれるとされる（橋元淳一郎「時間はどこで生まれるのか」'06）。70年前のゼヴィの時空間論はそうした時間の理解にも近く、あるいはジョン・デューイがかつて芸術の経験と捉えたものと変わるところはない（『芸術論』'34、鈴木康

司訳 '69)。五感を通し様々な視点から経験しはじめて理解できる建築の姿と、建築の経験を問う事なく建築の立論は不可能という考えを示すものでもあった。

■場合

CIAM崩壊前後、ガストン・バシュラーやクリスチャン・ノルベルク・シュルツらは現象学的あるいは実存主義的な観点から「物質的想像力」や建築の根源的な役割を問い直した（バシュラー「空間の詩学」'57、岩村行雄訳 '69、シュルツ「Intentions in Architecture」'68、「実存・空間・建築」'71、加藤邦男訳 '73）。それらは近代建築の背後に控える空間や時間といった抽象的、科学的な概念、そして世界中で広がり始めた近代建築や都市計画の貧しさに対する強力な批判となった。空間に対し「場所」を、時間に対し「場合（機会）」を説いたアルド・ファン・アイクもそうしたオルタナティブを考え実践に取り組んだ一人である（「場所と場合」、黒川紀章編「現代建築の創造」'71）。

■成長変化

60年代、新しい建築と都市のありようを探る前衛たちにとってモビリティや成長変化といった時間や運動に関する言葉がキーワードになった。多くの試行がなされるも、いずれも建築や都市を運動変化するものとして捉えようとする点に特徴があった。メタボリズムは変動に対しハードなシステムで対応しようとしたが、アレクザンダーは都市を計画することの不可能性を暴き、イギリスの前衛たちはアクティビティの変化に応答する装置を作ろうとした。後者は現象学や実存主義的なアプローチからする経験可能な時空に近い考えであったと言えるだろう。

■型

同時期、イタリアではティポロジア（建築類型学）が生まれる。遺跡の宝庫の地にあって過去と現在、未来への応答は日常である。サヴェリオ・ムラトーリらは開発圧力や老朽化に直面した古い町で調査を進め、建築の類型を整理し見いだされた型を生かすような計画によってコミュニティの継承と町の再生を

一体的に進めようとした。

類型はその場所で展開した生活が無数積み重ねられ形成される。身体を通し経験される時空とは違っていても時間によって純化された類型には膨大な数の営為が凝集されている。

遡って20年代、コルブは同様な時間の浄化力と機械生産からくるそれを等しいと見た。ギリシャ神殿が長い時間をかけ洗練、浄化され生み出されたプロセスは、製品から無駄を省き改良してゆく機械生産のプロセスと変わらない。それらはティポロジアの類型と同様、時間の浄化を受け時間を凝集した＜定型＞であった。

DINが最も早い工業規格の一つであったように定型の考えはドイツ起源であろうが、パウハウスが抽象美学の箱状建築しか生み出せなかったのに対し、コルブは定型を基礎としつつその上に立ち上がるものとして建築を捉えた。コルブの建築を編成するのは運動する身体でありその視線であった。人間の運動に沿って生成する時空の内部に時間を凝集した定型としてのモノが散開し、人間の生活はその間を縫うように展開する。アクロポリスがそうであったように建築はコルブによって時空に生起するコトとして再編された。

■身体

建築についての議論で確実な、あるいは広く共有されるような思考の枠組みが失われて久しい。そんな状況の最近の例を引くなら国立競技場を巡る議論だろう。古い競技場は潰され、どこか砂漠の風景でこそ美しく映えるような巨大な建物に置き換えられようとしている。ザハにとってその砂丘のようなシルエットは自身の原風景かもしれないが、バグダッドの新議事堂とは違いそれが東京でどれだけの共感をもって受け入れられるか審査評を眺めているだけでは分かりようがない。これを評価の枠組みが共有されないまま議論がすれ違うだけの悲喜劇と言うべきか。

磯崎新がそうした状況を＜手法＞によって突破しようとしたのは70年代である。磯崎は建築の時間の問題にも向きあっていた。戦争の焼け野原の原体験をもつ磯崎は建築や都市を生成と消滅、構築と崩壊を繰り返すものと捉えた。西欧的な構築に対して建築に絶えざ

る変容を見る態度であり、それを表出するための独特なレトリックが「終末論」であった（「孵化過程」'62）。

「闇の空間」（'64）において磯崎はゲーディオンの4次元時空に「現象学的身体論からの時空論」を対置する。主客は転倒し空間は「『時』に現れる特殊的なイマージ」となり、確実に存在するのは生きている今—現在の時間しかない。この時すでに先に引いたような時間論に限りなく接近していた。

磯崎は旧大分県立図書館（'66）において、建物を「骨組」と「流れ」がある一つの生命体として編成、類型化された内部の空間は生命体が「創発的形質」に従うよう各々が独自に変化する状態を構想した（「プロセス・プランニング論」'63）。どんな変化があっても建築家が構想した建物の全体性は維持され、むしろ変化が予測を越えるほど生成消滅するものとしての建築はその強度を増す。

ここで磯崎は制作者としての痕跡を残すべく「切断」という手法に辿りついた。一個の生命体、生成変化する建物という身体において、ある一瞬をもって全ての動きが止められる。運動する身体の断面が露にされ、内部を流れる力が晒されることになった。

この時磯崎は建築という身体に同化し、それを生きようとしていたと言ふべきではないか。そして自らその身体を引き裂くことによってその生身があるがままの状態で暴こうとしたのではないか。同時期の他の多くの建築家が意志なき機械という身体を生きたのに対し、磯崎は建築という命ある身体を制作者という意志をもって生きること賭けた。

磯崎が建築に見た身体は建築の経験をもたらしような身体とは全く異なる。そこには生身を伴う人間の姿はない。全てが前のめりだった60年代という時代がそうだったとも言えるが、その後、磯崎は身体を軸にして経験を濃密に語り始める。

今、身体の次元にまで降り建築を捉えようとする通底音のようなものがあるとしたら、それは建築に残された確かな、そして最期の縁を求める渇きであり、建築に時間を問う事もその一つの現われに他ならない。

（きしだ しょうご）

日本建築という 永遠の現在

九州大学大学院教授

土居義岳

1979年 東京大学工学部建築学科卒業。
1987年 パリ＝ラ＝ヴィレット建築大学卒業。
1988年 東京大学大学院 工学系研究科建築学専門課程 博士課程満期退学。
工学博士、フランス政府公認建築家。
東京大学建築学科助手、九州芸術工科大学助教授を経て現在、九州大学大学院教授。西洋建築史。
著書に『言葉と建築』『建築と時間』『建築キーワード』『アカデミーと建築オーダー』など。
翻訳にピエール・ラヴダン『パリ都市計画の歴史』、ジョン・オナイアンズ『建築オーダーの意味』、ロビン・ミドルトン等『新古典主義・一九世紀の建築』など。

■はじめに

時間はよくいわれるように過去、現在、未来という三つに区分されるのではない。存在するのは現在のみであり、過去と未来は不在である。厳密にいうと現在が存在するのではなく、現在において存在が可能になる。そして過去と未来は「ない」のではない。ないことそのものが過去であり、未来である。ないものは想起される。想起されて考える対象となるのが過去であり、未来である。そのとき起点はいつも現在である。現在という窓から、過去を再構成し、未来を想像し構想するのである。日本の近代建築は、この存在の条件としての「現在」という枠組みをどう整備するかの問いであった。

■過去の構成

日本建築は近代化の過程において、日本の時間と、西洋の時間をシンクロさせる必要に直面した。そのとき固有の歴史的プロセスを、西洋的な視点、あるいは西洋的な現代から、再構成しようとした。西洋哲学における時間論の緒論はさておき、この「過去」の再構成について、ふたりの日本人哲学者が語っている。大森荘蔵は、過去は奈落であって、端的な無であり、過去とはそのつど人間が想起し、再構築した言語的世界にすぎないと指摘する。この意味で、過去とは制作である。中島義道は、ハイデガーや持続の理念には否定的であり、むしろアウグスティヌスの理論に時間の根拠をみいだす。人間がときに後悔するのは、過去に選択肢があって、過去のある選択が正しかったり間違ったりしたという判断ができるのは、そもそも人間的自由の根源は過去にあるからだと指摘する。そうした観点からは、伊東忠太の「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」（1909年）も、岸田日出刀の『過去の構成』（1929年）も、堀口捨己の茶室研究と「日本的なもの」の探究も、近代美学の遡及という点で、過去の再構成である。

■永遠の現在

過去はどのように再構成されたとして、ではどういう「現在」が起点とされたのか。結論からいうと「永遠の現在」なのである。お

そらくここで堀口の転換をさらに再転換することは興味深い。つまり堀口以前において、日本を代理代表する建築は金閣寺であり宇治の平等院鳳凰堂であったが、堀口の転換のあとは東大寺南大門であり茶室となった。この転換は、それまでの古い世代にかわっていわゆるモダニズムの洗礼を受けた新しい世代への、理論以前的な即物的で不可逆的なものであるように、述べられる。しかし、はたしてそうか。

■平等院鳳凰堂の神話

というのは平等院鳳凰堂は、いわゆる19世紀的な折衷主義のたんなるアイコン的存在ではなく、日本建築の意識の構造を決めたシンボリックな存在なのである。周知のとおり、藤原頼通が厭世的雰囲気の中かで宇治に建設した鳳凰堂は、極楽浄土を描いた曼荼羅の仏殿であり、内部の壁には諸仏が描かれ、中央には阿弥陀が安置された。末法思想の広まりを契機として、現世での救済はなくなり、極楽浄土での救済をもとめ、そのために浄土のシミュラクルをリアルに建設する。現世での救済がなければ死後、阿弥陀仏にすがって極楽往生をとげたいと思うようになる。浄土とは清浄な世界であり、仏が治める世界である。浄土信仰が1世紀にインドでうまれたとき、死者の死後を祈ることであった。しかし平安時代は、自分が阿弥陀仏の極楽浄土に往生することを願うものとなる。それは「汝の死」から「己の死」へのパラダイム転換であり、己の死をなにより現在において問題とする、現在化なのである。

親鸞はこの浄土宗を改革し、あらたに台頭する階級としての武士と庶民の宗派としての浄土真宗を構築し、その教祖となった。その他力本願とは、「如来の本願力」によるものであり、絶対他力を強調するのだが、これは自己の放棄なのではなく、超越的なものを認めることであった。専修念仏による「南無阿弥陀仏」を繰り返す。如来の本願によって与えられたこの名号をそのまま信受することによって、ただちに浄土へ往生することが決定し、その後は報恩感謝の念仏の生活を営むものとする。こうした信仰者と超越者である「阿弥陀」の直接的結合は、多神教的ではなく、一神教的である。ゆえに経済思想史では

マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』などと比較され、禁欲と資本主義が連動する典型例として同一視されさえした。

■鳳凰堂の再神話化

平等院鳳凰堂は、1893年のコロンビア博（シカゴ博）の日本館「鳳凰殿」のモデルとなった。岡倉天心らが日本館の政治的・経済的・文化的な重要性をよく認識し、日本館のモデルとして「平等院鳳凰堂」と「金閣寺」を候補としたあげく前者を選んだ。

ところで運命の符合はたしかにある。この博覧会の枠組みのなかで同年、シカゴ万国宗教会議が開催された。シカゴの長老派教会はキリスト教各派とユダヤ教の代表からなる準備委員会を組織し、世界中の宗教関係者に参加を呼びかけた。キリスト教の諸派とともに、イスラム教、仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教などの代表者があつまり、宗教の世界化と相互理解が深まった。禅、ヨガといった宗教文化が世界的になる契機ともなった。日本からは、神道、仏教、キリスト教、神智学の代表が参加した。とりわけ禅の代表・釈宗演^{しやくそうえん}は禅をはじめて西洋に広めたのみならず、通訳として鈴木大拙を随行させ、この大拙を世界的禅の創設者とした。大拙は、釈の薦めで1897年からふたたびアメリカに滞在し、仏典を英訳に翻訳し、さらに禅の著作を英語で出版するようになった。とくに“Essays in Zen Buddhism”（1927年）は英語における基本的文献となった。

■鈴木大拙と「日本的靈性」

禅においては釈宗演の弟子、1875年にニューヨークで設立された神智学協会の会員、スウェーデンボルグ『神智と神愛』の翻訳者、1921年より大谷大学教授である大拙は、禅の国際化をはかり、神智学と親鸞の教えを総合し、西洋と日本の交差点において「靈性」の理念を表明した。そして『日本的靈性』（1944年）を出版する。西田幾多郎との親交や類似性も指摘されるように、西田が仏教哲学を西洋哲学の言葉で語ったとしたら、大拙は神智学を禅と浄土宗のことばで語ったのかもしれない。大拙は「靈性」をさまざまに説明する。

キリスト教における三元論（感性、知性、靈性）、近代哲学における二元論（身体、精神）を念頭におけば、そして神智学における「ひとつ」の概念を念頭に置けばその輪郭はみえる。大拙によれば、靈性は精神と物質、主観と客観という二元論を克服する。だから近代哲学のアポリアが意識されている。靈性は知性ではない。個が、個の代表としての親鸞が、神、阿弥陀、「ひとつ」と直接交信するためのものであった。「南無阿弥陀仏」とはその交信の実践である。

この超越との交信としての「日本的靈性」は時間的なものでもあった。神道は、宇宙生成論を根拠とするが、過去のみを重要視し、時間は直線的となり、現在と未来がみえてこない。それにたいし大拙は「生は円環である、中心のない、或いはどこまでもが中心である円環である。この生の無限大円感性は靈性でないと直覚できない」と指摘する。それは円環的な、しかし夜と昼といった循環的ではない、時間である。念仏を無限に繰り返すのは、個と唯一者の一体化であり、一念の今であり、永遠であり、継起的時間そのものであり、時間即空間と空間即時間であり、永遠の今なのである。「今は永遠の今である、絶対現在である。過去・現在・未来と直線に流れて続く今でない、三世心不可得の今である。無限大の円環のみに見いだされる中心である。」

■靈性論の展開

磯崎新は「孵化過程」（1962年）のなかで「廃墟はわれわれの都市の未来の姿であり、未来都市は廃墟そのものである」と述べ、ギリシア神殿の廃墟（過去）が空中都市（未来）と無媒介に接ぎ木することで、未来が過去であり過去が未来であるというリバーサルなメビウスの輪のような時間図式を示す。大拙ならそれを日本的靈性というであろう。さらに磯崎は1978年パリのサロントヌで「間展」を開催したのだが、そこにおいて間とは、時間と空間を横断する第三の概念である。すなわち時間とは時と間であり、空間とは空と間であり、そういう意味で二元論の克服、第三のメタ概念の構築という点で、「間」は「靈性」と同じ場所をしめている。それは大拙のいう「永遠の今」に近い。

さらに「間」の建築的使用の考案者といえる伊藤ていじの「イマジナリースペース」の概念である。彼はシンボルによる領域区分の仏教概念「結界」や、「間」を建築理論のなかに導入したのだが、1963－65年にワシントン大学における講義録にもとづく『日本デザイン論』（1966年）によれば、いわく、しめ縄、絵画における「空画」、書道におけるヒドストロークなどはイマジナリースペースである。日本的空間はフィジカルとイマジナリーの二重構造とするのだが、ここに大拙との構造的相似が見られる。フィジカルスペースは知性によって、イマジナリースペースは靈性によって把握されるのである。

■結論：平等院鳳凰堂の再々神話化

こうした文脈から考えて、平等院鳳凰堂が現代建築のプロトタイプになっているのは偶然以上のものに思える。たとえば磯崎新の《ティームディズニービル》、安藤忠雄の《水の教会》、谷口吉生の《豊田市美術館》、法隆寺宝物殿》、《鈴木大拙館》らはそうである。とくに最後はまさに鈴木大拙を記念する博物館である。そこに平等院鳳凰堂というプロトタイプは亡霊のように執拗に再生している。それこそ日本近代における靈性のあらわれであるかのようである。

平等院鳳凰堂は、浄土のミニチュアであったにとどまらず、近代における日本的靈性、間、などの議論をとおり、日本的モダン、「永遠の現在」のプロトタイプになった。

こう考えてもいいだろう。近代化において、あるいは現在のグローバル化において、ときに文化的接ぎ木をしなければならない。そのとき情報やものは接ぎ木できるが、人間の意識そのものである時間はそうはできない。しかしそれでも異なる系として展開してきた異なる時間を関連づけるとき、両者のあいだにバッファーを設置しなければならない。そこで考案されるひとつの形態が「永遠の現在」なのであって、そこにとりあえずさまざまな時間は、ある意味で超時代的に、超歴史的に、リンクされるのである。日本建築はその深層において歴史（時間性）を拒否しているのではないかとさえ思える。

（どい よしたけ）

25年 100年 1000年

早稲田大学理工学術院 教授

中谷礼仁

1965年生まれ。

1987年早稲田大学理学部建築学科卒業、大阪市立大学工学部建築学科専任講師をへて2007年より早稲田大学理工学術院建築学科准教授。2012年より同大学教授。

2010-2011年日本建築学会発行『建築雑誌』編集委員会委員長。2013年度 日本生活学会 今和次郎賞（瀝青会名義）、2013年度 日本建築学会第一回著作賞（同上）。

主な著作に『今和次郎「日本の民家」再訪』瀝青会名義（平凡社、2012年）『新訂日本建築辞彙』太田博太郎、稲垣栄三編（共著）『セヴェラルネス+事物連鎖と都市・建築・人間』『近世建築論集』『国学・明治・建築家』『日本建築様式史』（共著）

■25年

昨年、秋も深まる頃、滋賀のほとりの町にいた。

とある公民館に案内された。小劇場と保健施設とを組み合わせたものである。周囲の山のかたちに沿うように大屋根が建物を覆っている。その金属の色もだいぶ落ち着いて、外装煉瓦も風情のあるもので、たずねてみると近場の土で焼いたと言う。

設計者は白髪で大柄の、かくしゃくとした男性であり、高齢ながら背筋を伸ばして私たちを迎えてくれた。彼が人格者としても周囲から認められた人物であることがみてとれた。

ここに来たのは維持管理のゆき届いた質の良い建築を表彰する賞の審査のためであった。もちろんこの建物はその賞に値する好見本なのだが、と同時に建物が長く残るには、設計者を離れて建物自らが愛され、使われ続けていく時間をどのように獲得していくかがとても大切なものであると感じた。

この建物は、この人格者でもある設計者の働き盛りの頃の会心作の一つだったであろう。それから25年が過ぎ、やはり人は老いた。それに比べて建物はまだまだ壮年のままである。建物の壮年をささえるのは世代を超えて受け継がれる人々の営みである。このとき、建物は一つの人格を離れて、社会あるいは共同体の時間に触れはじめるのである。建物が生きていくには、それを用い、愛する共同体が成り立っていなければならない。25年、50年、そして100年と建物が生き残っていくには、むしろその建物をささえる集団がいかに健全に成立し続けることが鍵になってくるのである。

■100年

いろいろ日本を歩いていると、限界集落めいた荒びれた町や村に出会う。

限界集落とは65歳以上の高齢者が地域の過半数を占める時に用いる言葉である。その数は定義上はいまだに多くはないが、日本のいくつもの地域が潜在的、日常的に限界集落的な要素を抱え込んでいることは確かだろう。限界集落は山間の村に多く、その衰退の原因は林業の衰退、ようは共同体の生業の衰退と深く関連していると聞く。

と、同時に都会の中でも、東京の新宿区の戸山団地などを代表として限界集落の条件にあうような地域がみいだされつつある。

このとき、ふたつの推察が頭をよぎる。

ひとつは、限界集落そもそもがどのような歴史を持っていたのかである。戸山団地を思い出すときもちろん成立経緯は全く違うとはいえ、山間の限界集落も、実は団地と同じようなある時代の「ニュータウン」であったのではないかと考える余地はないのだろうか。これはきちんと調べてみないとわからないことだし、そしていま私はそれを行わずにこれを書いているのだが、限界集落と呼ばれる地域が太古から続くような古い集落ばかりだとしたら、これは国土という、経済共同体の変質に深く連動する大事件になってしまうのではないか。逆に限界集落が、たとえば100年、あるいは100年単位の中で誕生し、そして衰退していくのだとしたら、それは大正、昭和の開拓村が打ち捨てられることもあり得るのと同じようなレベルでその盛衰を冷静に見据えることができるのではないか。いずれにせよ私たちは、その地域の性格をその誕生の理由からはじめ、きちんと時間の推移の中でとらえることで、闇雲にその衰退を嘆くのではなく、その原因を考えられうるのではないかとすることである。

もうひとつは、建物の持つ時間がこのような100年単位の時間を超えて存続することは、限界集落の例を考えれば、相当に難しいことなのだということである。もちろん多くの人は建物にそのような長い時間を生きることがを要求することはまれだろう。建物は朽ちていき、消滅していくことで、その場所に新しい時代にみあった新しい環境としての器を提供することができるのである。限界集落にいて、人々から見放され、壊されることもなく、死んだまま屹立しているかのような廃屋をみるたびに、建物の幸福な壊され方、死に方も考えていいものだと思う。それは地域の共同体の生死とも深くかかわっている標である。

■1000年

もしある地域が1000年以上経過して残ってきたことがわかったとき、それは喜ぶべきことだと思う。そしてそんな地域は意外に限界

集落よりも多いのではないか。そこの住民さえにも知られずに千年以上続く集落、そんな地域の普通さは、最も普遍的な人間の生活の仕方に触れるのではないかと思う。最近、千年村プロジェクト (<http://mille-vill.org/>) という運動に参与しているのだが、それはまさにそういう村を探し出し、その持続の原因を分析して、次の1000年を考えていこうとするものである。



京都府亀岡市河原林町勝林地区

現在のところ、平安時代に編纂された辞書に記載された郷名のうち地理学者達によって比定された場所をプロットする作業が終わり、それはウェブサイトで公開している。全国すべてを回ることにはできないので、私たちは当面活動場所の関東近辺の該当する地域を訪れてみているのである。

すると驚いたことに、限界集落に一つも突き当たることがなかった。山間がいきなり広がり、そこに海のように続く水田、たわわに稲が実り、人々が生きていた。狐につままれ

たような心持ちがした。とにかく驚くべきことだった。

そこで、ある一地域を特に選んで、環境、集落構造、共同体のあり方について調べてみようということになった。

その地域は川の氾濫によって他の箇所に比べて盛り上がった微高地にあった。その微高地に人は家を建て、周辺を水田で埋め尽くしていた。古代の駅のあった場所であったが、その駅の跡地を境にして集落配置の性格が本質的に変わっていた。地域合併し、多くの地名が失われていたが、元の字（あざ）境界は小道や田んぼの畝や土地境界となに残っていた。つまり現在においても過去の要素は生き残っているのがあった。

その報告をその地域の公民館を使って、地域の方々に発表した時である。ある人がきわめて重要な質問を私になげかけた。

「なぜ千年なのですか？」



千葉県市原市島野地区

私もその理由を知りたかったので、むしろ聞き返してみた。

「なんでだと思いますか？」

「そうだね、何か考えやすい感じがするね。」

その人も1000年という単位に、私と同じ想いを抱いていたことがわかった。

1000年という単位は、持続的な地域（環境＋集落＋共同体）のことを考える時、実にぴったりと当てはまる時間単位なのである。なぜだろうか。

まず、すでに日本には1000年以上経っている地域がたくさんあるという事実がある。さらに上の単位である10000年では人間の歴史自体がなくなってしまう。

そしてギリシャ文明では3回も要らず、中国の古代文明でその村が生きてきた時間を4回反復すればよく、人類最古の巨石文化（マルタ）にたどり着くにも7回時間を繰り返せばいいのである。

このとき1000年という単位は、日本にある実際の地域が持っている時間と世界史、さらに人類の誕生までも容易に繋げてくれる基準を私たちに用意してくれるのであった。

1000年という時間感覚がもたらす認識は大きいはずである。

このように私たちは同時に、さまざまな時間単位を使って、その場所や建物のことを考えることもできるのである。

(なかに のりひと)

千年村プロジェクト

『和名類聚抄』の郷名からみつける

このデータベースでは、平安朝文獻『和名類聚抄』に記載された古代郷名3986件のうち、現在の場所に比定可能な1977件のみをプロットしています。詳しくは『和名類聚抄』の郷名比定地による〈千年村〉データベースの扱いについてをご覧ください。地図上のプロットは地誌研究にもとづくゆき程度にお考えください。〈千年村〉は他の文獻資料や遺跡の発掘情報、伝承など、さまざまな方法から発見することができます。今後の研究の進展も反映していく予定です。皆様からのご報告も併せてお待ちしております。

このページの最終更新日時は 2014年6月20日 (金) 18:48 です。
このページは 481 回アクセスされました。
プライバシー・ポリシー 千年村プロジェクトについて 免責事項

webサイト「千年村プロジェクト」 地誌図と照らしあわせると、異なる地質の際に、千年村が立地している様子がうかがえる

短命建築の教訓

つくり手の自己満足で
建物は残らない

日経BP社ケンプラッツ副編集長

瀬川 滋

1976年生まれ。2001年早稲田大学大学院理工学研究科修了後、日経BP社に入社。建築専門誌「日経アーキテクチャ」や土木専門誌「日経コンストラクション」の編集部を経て、2014年3月から日経BP社が運営する建設・不動産総合サイト「ケンプラッツ」編集部の副編集長。

<http://kenplatz.nikkeibp.co.jp/>

純白のタキシードとウエディングドレス姿の2人が幸せの黄色い車に乗って登場！

誓いのキスを交わし、親族や友人から大きな拍手が送られた——。首都高速道路会社のホームページに、こんな結婚式の様子を伝える記事が載ったのは2009年のことだ。“式場”となったのは首都高速10号晴海線。開通直前の目玉イベントとして、一般公募で選ばれたカップルが首都高史上初となる高速道路上で挙式した。「黄色い車」とは言うまでもなく、



築30年で解体された赤プリ。上から順に2012年12月中旬、13年1月中旬、13年3月下旬に撮影（写真：日経アーキテクチャ）

パトロール用の四輪駆動車を指す。

「この場所を車で通るたびに、この日のことを思い出さだろう」と新郎は語った。道路は巨額の税金を投じてつくられた社会インフラである。数十年のうちに消えてなくなることとはまずない。新郎のコメントは的を射たものだった。

■4mグリッドの鉄骨が用途変更を阻む

それから2年後の2011年、筆者はテレビの画面越しに「結婚式を挙げた思い出の場所を返せ！」と憤る別の男性の声を聞いた。東京都心の赤坂見附交差点を見下ろすグラントプリンスホテル赤坂（旧赤坂プリンスホテル、通称赤プリ）が営業を終えたのだ。

高さ約140mで40階建ての赤プリの新館は、丹下健三氏が設計、鹿島が施工して1982年に完成。クリスマスシーズンは若者の人気スポットとして予約でいち早く埋まり、バブル経済期には100%超の稼働率を記録した。1つの客室に昼と夜とで2つの予約が入ったからだ。国会議事堂に近いこともあり、しばしば政治家の会合の舞台にもなった。

そんな新館は現在、わずか30年の寿命で跡形もなく解体された。跡地では2016年夏ごろの開業を目指して、高さ180mのオフィス・ホテル棟と高さ90mの住宅棟の建設工事が進んでいる。解体を含む総事業費は約980億円。東京都の「再開発等促進区を定める地区計画」の決定を受けて、容積率は建て替え前の300%から600%へと倍増する。

事業主である西武プロパティーズ（埼玉県所沢市）は、建て替えの理由を2つ挙げている。1つは、リスクを分散しつつ収益力を高めるため。ホテルの売上高が景気に左右されやすい半面、オフィスや住宅の賃料収入は比較的安定して確保できるとみる。

もう1つは、10～20年先までホテルの競争力を維持するのが難しいと考えたからだ。ネックとなったのは2.4mの天井高。丹下氏は設計当時、都心の超高層ホテルにおいて住宅のようなスケール感にこだわったという。しかし、西武プロパティーズは低い天井が非日常性を求めるホテルにそぐわないと判断。改修だけでは、都心に次々と開業する外資系ホテルに太刀打ちできないと結論付けた。

赤ブリの建物を使い続けることは本当に不可能だったのだろうか。客室の配置に合わせて、4m×4mのグリッドで組んだジャングルジムのような鉄骨が、オフィスなどへの改修を阻んだとの見方は多い。

これに対して、赤ブリの構造設計を担った元鹿島の設計者は反論する。「1本1本の柱や梁は細く、加わる力も小さい。逆に言えば、一部を撤去して吹き抜けをつくるなど、改修案はいくらでもあったはず。大空間のオフィスは難しいものの、SOHO（スモールオフィス・ホームオフィス）のような使い方はできた。事前に相談がなかったのは残念だ」

■長寿命の手本が20年で解体

建築費に比べて土地代の占める割合が大きく、オフィスなどの需要が旺盛な都心において、時代を彩った超高層が設計で想定した耐用年数よりもはるかに短い期間で消滅する例は他にもある。

1993年に日本長期信用銀行本店ビルとして建てられた新生銀行旧本店ビル（以下、旧長銀ビル）もその1つだ。不動産投資を手掛けるケネディクスと東急不動産、日本政策投資銀行が2012年に土地と建物を取得。2013年に解体工事を始め、2017年までにオフィスビルに建て替える。取得費や工事費を含めた総事業費は800億円程度を見込む。

旧長銀ビルが赤ブリと異なるのは、建て替え後も解体前と同じ許容容積率850%、高さ132mなどの都市計画決定された建物規模をほぼ踏襲することだ。建て替えによって床面積を増やせるわけではない。

しかも、旧長銀ビルは様々な長寿命化対策を施した手本ともいえるような建物だった。例えば、将来の設備の増強に備えて階高を5.1mとし、高さ1.5mの天井懐と30cmの床下空間を確保していた。最新のオフィスビルでも階高は4m程度が一般的なので、旧長銀ビルがいかに余裕を持ってつくられていたのかが分かる。軒下に給排気スリットを設けて空調機器の増設に対応したり、外周部の柱の内側に室外機を収納して点検や更新を容易にしたりといった工夫もなされていた。

それにもかかわらず、旧長銀ビルはなぜ早々に解体されるのか。

事業関係者の1人は「レンタル比の低さがネック」と明かす。レンタル比とは、延べ面積に占める賃貸可能な床面積の割合を指す。銀行の本店として設計された旧長銀ビルは、1階と2階に銀行窓口を設けるなど、そのままでは一般のテナントに貸しにくい構造だった。地下には倉庫や金庫室もあり、改修してもレンタル比は4割台にとどまったとみられる。一方、新築の大規模オフィスビルのレンタル比は通常、6割を超える。

もう1つの大きな要因は、この20年間にビルの基本スペックが格段に向上していることだ。「オフィスのマーケットでは、新築ビルに圧倒的な優位性がある」（先の事業関係者）。設備の更新で対応するよりも新築ビルの仕様の方が賃料を高く見込めるため、投資回収の確実性が増すと判断した。仮に改修して使い続ける場合、長銀の経営破綻という建物にまわりついた負のイメージが、賃料水準に影響するとの見方もあったという。

■“老いない古さ”が価値

「赤ブリの解体は納得できない」。日経BP社の建設・不動産総合サイト「ケンブラッツ」が2013年1月、約200人の建築実務者を対象にアンケート調査した結果、回答者の49%がこう答え、「納得できる」と答えた33%を大きく上回った。旧長銀ビルも日本建築学会作品選奨として表彰されるなど、建築界での評価は高い。エントランスロビーの外周にDPG（ドット・ポイント・グレージング）工法を国内で初めて本格採用し、ガラス建築の潮流を生んだ建物として知られる。

しかし、こうした評価は建て替えを決めた事業主の判断基準とは無縁だったようだ。REITに代表される不動産証券化手法の浸透などにより、建物の金融資産としての流動性は、設計当時とは想定できなかったほど高まっている。建築界での評価が何らかの経済的価値に反映されない限り、都心のビルの短命化を防ぐことは難しい。

赤ブリのように複雑な形状をした建物は、整形で延べ面積が同じ建物と比べて50年間のライフサイクルコストが1割以上膨らむという試算もある。意匠を追求する半面、こうした代償も伴う。設計者は建物のライフサイク



築20年で解体される旧長銀ビル。2014年4月下旬に撮影。設計は日建設計、施工は竹中工務店が手掛け、1993年に完成した。耐用年数は60年を想定していた（写真：日経アーキテクチュア）

ルコストを見通した提案をしなければならないのはもちろん、設計の意図や工夫、実現する価値を所有者に伝え続けることが重要だ。

もっとも、建物の短命化が懸念されるのは現在の都心に限った話だ。今後、日本の人口減少に拍車がかかれば、建て替えたくても建て替えられないという全く逆の事態が起こり得る。全国ベースでみると、建物の平均寿命は既に年々延びているという調査結果もある。設計者の説明責任が増すのは間違いない。

長年きちんと維持管理された建物は、古さ自体が価値を持つ。その魅力を巧みに利用しているのが、ブライダル事業を手掛けるノバレーゼだ。同社は築80年近い洋館などを次々と借り受けて、結婚式場に改修している。

建築基準法の適用除外や用途変更に対する行政や近隣住民の許可など複雑な手続きが必要となるものの、歴史的な建物は新築する式場と比べて時間がたっても陳腐化しにくい特徴がある。何でも新しいものが好まれるブライダル業界において差別化できる。建物が挙式後も思い出とともに残り続けるという安心感も評価されているという。

建築が長く使われ、真の社会インフラとなるには、設計者が所有者や社会にその価値と具体的な対策を示さなければならない。そのための努力はまだ不足している。

（せがわ しげる）

テート・モダンに学ぶ 過去と未来をつなぐ ことの意味

京都工芸繊維大学教授

松隈 洋

1957年兵庫県生まれ。
1980年京都大学工学部建築学科卒業。
前川國男建築設計事務所を経て、2000年4月
京都工芸繊維大学助教授。2008年10月より現
職。工学博士（東京大学）。
専門は近代建築史、建築設計論。
2013年5月よりDOCOMOMO Japan代表。
主な著書に、『残すべき建築』、『坂倉準三と
はだれか』、『近代建築を記憶する』、『レイ
ス・カーン—構築への意志』、『建築家 大高
正人の仕事』（共著）、『前川國男 現代との対
話』（編著）など。
DOCOMOMO20選展、100選展、前川國男展
をはじめ、レーモンド、坂倉準三、ペリア
ン、白井晟一、丹下健三、村野藤吾など多く
の建築展に携わる。
文化庁国立近代建築資料館運営委員。

■テート・モダンの衝撃

建築の保存と再生を考えると、その成功事例として繰り返し参照される代表格の建築が、イギリスのロンドンに、使われなくなって放置されていた火力発電所を保存活用して2000年に開館した現代美術館、テート・モダンではないだろうか。筆者も2001年5月に訪れる機会があったが、火力発電所とは思えないような繊細なディテールのレンガ壁とその上に載るガラス箱の鮮やかな対比と、巨大なタービン室を改造した吹



テート・モダン。テムズ川沿いの北側の外観 2001年撮影／松隈洋（以下同じ）

抜けの展示ホールの清新な大空間に圧倒された。世紀が入れ替わるミレニアムのオープンに合せて、目の前を流れるテムズ川を挟んで対岸のセント・ポール大聖堂との間に架け渡された吊り橋（ミレニアム・ブリッジ）の相乗効果も大きかったのだろう。都市の中に取り残されていた工場地帯の再開発としても画期的な意義を持つプロジェクトとなった。

しかし、その計画は、最初から現在の姿に

まとまるような予定調和の形で進められたわけではなかった。さまざまな歴史の偶然と人々の思いが奇跡的な形で重なって実現したのだという。そのことを、美術館の売店で



タービン室を改造した展示ホール

たまたま手に取ったテート・ギャラリー理事会（the Trustee of the Tate Gallery）が発行した大部の本、『BUILDING TATE MODERN』（2000年）に教えられた。ここでは、美術館の完成までの経緯をまとめたこの本の内容を咀嚼しながら、何がこのプロジェクトの成功を

もたらしたのか、建築の持つ不思議な力について考えてみたい。

■G.G.スコットという建築家

レンガ張りで細かな装飾を施したクラシクな印象を受けるその外観から、元の火力発電所が戦前期に建てられた年代ものの建築だと思ふ人も多いに違いない。しかし、この建物は、もともとは、戦争によって1939年から中断されていた火力発電所の建設計画が復活して建設されたものであり、ロンドンの戦後復興の一環としてスタートする。1947年に設計案がまとまり、1948年から工事が始まって1953年に第1期が竣工し、発電所としての操業がスタートする。設計を手がけたのは、Sir（卿）の称号を持つ長老の建築家、G.G.スコット（1880～1960年）である。その後、この発電所が最終的に完成した姿となったのは1963年、スコット没後のことだった。

彼は、22歳という若さで設計コンペに一等となったリバプールのイングランド国教会で知られ、その後も数多くの教会や学校、図書館などを手がけていく。その作風は、1930年代から世界を席卷するモダニズム建築の潮流とは一線を画し、むしろ一時代前のゴシック・リバイバル様式を得意とするものだった。そのためなのだろう、当時は、およそ火力発電所という工業化時代のモニュメントを手がける建築家には相応しくない、と誰もが感じていたという。だが、そこは歴史の綾が織りなす面白さなのかもしれない。彼は、中庸の穏やかで繊細なディテールを持つ建築を好み、頑固な伝統主義者でも急進的なモダニストでもなく、過去の優れた伝統とモダニズムを上手に接ぎ木する方法を一人追い求めていったのである。

このような地道な努力が認められたのだろう。スコットは、いつしか、困難な仕事をきちんとこなし、質の高い建築を設計できる信頼される建築家としての地位を獲得する。そして、ロンドンの州議会から、テムズ川沿いのテート・モダンよりもっと西に位置し、すでに建設が始まっていたパタシーAと呼ばれる火力発電所の外観デザインを任されたのである。彼は、不粋な鉄筋コンクリートの煙突をギリシア神殿のエンタシスの柱のように

扱って優美な曲線と垂直性を高めるフローティング（堅溝）を施し、外壁にはレンガを積んで細かな装飾を加えることによって、巨大で冷たく暗い印象の強かった火力発電所を人間に親しいものへと転換させることに成功する。1935年に竣工したこのパタシーA火力発電所は、ロンドンの人目を引く近代建築のランドマークとして絶賛された。

■時代遅れのバンクサイド火力発電所

こうして迎えた戦後、パタシーA火力発電所の成功もあって、スコットは、同じテムズ川沿い南側のBankside（旧跡地区）に戦前から計画されていた新しい火力発電所の設計を依頼されたのである。しかし、そこは、パタシー地区とは異なり、対岸にセント・ポール大聖堂がそびえる極めてデリケートなロンドンの要となる敷地だった。そのため、建設反対の声も数多く上がったという。しかし、スコットは、セント・ポール大聖堂という宗教施設の対岸に、それに拮抗するような高い質を持った“エネルギーの聖堂”（cathedral of power）を築くのだと、技術者の協力を得ながら、設計案を根本から練り上げていく。もちろん、そこで目指されたのは、モダニズムの抽象的で先鋭的な造形ではなく、同世代のオランダのW.M.デュドック（1884～1974年）や、先輩格のアメリカのF.L.ライト（1867～1959年）などの影響を強く受けた、巧みな折衷様式の建築だった。こうして、このバンクサイド火力発電所には、パタシーA発電所の成果を発展させ、レンガを用いた繊細なディテールやリブ状の窓廻りのスリット、パラペット上部の装飾、先細りの高くそびえる煙突など、およそ火力発電所とは思えない陰影のある魅力的な造形が隔々にまで施されていたのである。

しかし、竣工後は、1960年にすでにスコットが死去していたことも災いしたのか、かつてパタシーA火力発電所で賞賛されたような評価を与えられることはなかった。むしろ、モダニズムを信奉する当時の建築評論家から、時代遅れとの烙印を押され、構造とデザインを切り離し、鉄骨造にレンガの衣をまとわせただけの最も悪い表明とまで酷評されてしまう。

その後、やはり当初から懸念されていたよ

うに、ロンドンの中心部という好立地や公害問題への関心の高まり、オイルショック後のエネルギー転換という時代の趨勢もあって、バンクサイド火力発電所は、1981年には閉鎖され、その後は長く放置される。そして、1993年には、国の文化財には値しないとの結論をイギリスの文化省が下したのである。

■土壇場での逆転劇と建築の力

そんな中、ミレニアムに合せて新しい現代美術館を計画中だったテート・ギャラリー美術財団のメンバーが、偶然にも、イギリスの公共放送BBCがこのバンクサイド火力発電所の価値を伝えるテレビ放送を見たことがひとつのきっかけとなって、事態は動き出す。財団は、急きょ、打ち捨てられる寸前だったこの火力発電所を買収し、現代美術館へと再生させることを決断、公的資金の援助も得て、現在の姿が実現する前代未聞のプロジェクトをスタートさせたのである。竣工から31年が経過した1994年4月のことだった。

財団は、この負の遺産とさえ思われていた建築の潜在的な価値を最大限引き出すために、全世界から英知を集めるべく、同じ年の6月から設計者を選定する作業に着手する。そして、148人の応募者の中から、最終的に6人の建築家を選んで指名コンペを実施する。選ばれたのは、デビット・チップパーフィールド（イギリス）、ヘルツォーク&ムーロン（スイス）、ラファエル・モネオ（スペイン）、レム・コールハース（オランダ）、レンゾ・ピアノ（イタリア）、そして、安藤忠雄だった。自国の候補者が一人だけという選定結果からも、いかに財団が最良の方法を模索しようとしていたのかがわかる。

設計コンペの審査の詳しい経過はわからない。それでも、一等を獲得したヘルツォーク&ムーロンの案がなぜ選ばれたのか、は、各案の特徴を見比べて、これまで記してきた経緯を踏まえるとき、容易に明らかとなる。すなわち、彼らの案が、スコットの建築の持つ魅力とセント・ポール大聖堂の対岸にある立地条件に、もっとも明快に答えていたのである。他の案では、スコットがあればほど大切に設計した高い煙突をすべて撤去したり、セント・ポール大聖堂と対面しているテ

ムズ川側のファサードにガラス箱や別の要素を加えてしまうなど、その建築的な魅力を大きく損ねる改造が施されていた。それに比



入口のある西側の外観

べて、ヘルツォーク&ムーロンの当選案では、テムズ川側のファサードに取り付いていた雑多な部分を大胆に取り除いて、より整然とした姿に還元しつつ、煙突も含めて建物全体のシルエットをまったく変えることなく、屋上にシンプルなガラス箱の増築部分を載せる、というさりげない方法を用いることによって、既存の建物が持っていた陰影やディテールの繊細さをより引き出し、さらに現代性を対比的に表現することにも成功する。

こうした経緯を見てくると、テート・モダン



最上階からテムズ川越しに見るセント・ポール大聖堂

の姿へと再生されたことがわかる。もしスコットが執拗に同時代の建築とは異なる繊細なデザインを施していなかったら、もし文化省が国の文化財に認定していたら、もしBBCがこの忘れ

られていた建物に光を当てる番組を制作していなかったら…。そう考えると、スコットがこの建物に込めようとした価値が、世紀を越えて、現代美術館という形を得て、はじめて十全に開花した、と見なすこともできるのである。同時代の狭い視点からではなく、建築のもつ変わらない力を見定める想像力と過去と未来をむすぶ創造力こそ、テート・モダンが私たちに教える最大の魅力なのだと思う。

（まつくま ひろし）

人と人とをつなぐもの ～未来に続く場所へ～

滋賀県立大学教授

陶器浩一

1962年 3月 大阪府生まれ
1986年 3月 京都大学大学院修士課程修了
同年 4月 ㈱日建設計入社
2003年 4月 滋賀県立大学助教授
2006年10月 同・教授 現在に至る

主な作品

キーエンス本社研究所ビル、梅田ダイビル、
愛媛県歴史文化博物館、愛媛県美術館、積
層の家、清里アートギャラリー、たいさんじ
風花の丘、若葉台の家、水都大阪水辺の文化
座、澄心寺庫裏、海光の家、半居、福良港津
波防災ステーション、竹の会所、さとうみス
テーション、浜の会所

主な受賞

JSCA賞、Outstanding Structure Award
(IABSE)、松井源吾賞、日本建築学会賞(技
術部門)、日本建築家協会賞、日本建築大賞、
SDレビュー朝倉賞、日本建築学会作品選奨

■はじめに

「竹の会所」は東日本大震災の津波被災地において、学生たちと築いた仮設集会所である。4年間の仮設建築物として建築確認を得ている。

何故4年間なのか。何故仮設なのか。

物理的な限界や社会的な制約ではなく、あり続けてはいけない建物だからである。

■みんなの場を

震災ひと月後に津波で被災した知人(高橋工業高橋和志社長)を見舞ったときのことである。すっかり変わってしまったまちを眺めながら、「オレ達のことより、子供たち孫たちに胸をはって残せる地元をつくりたい」という言葉に胸を打たれ、「ただ、みんなが集まる場所もなくなってしまった。」とお聞きしたとき、このプロジェクトを決意した。

地域では伝統芸能「虎舞」が盛んで週2回欠かさず練習を行っていて、それ自体がお年寄りから小さな子供まで集まるコミュニティとなっていた。その場所も道具も津波で流されてしまって皆の気持ちが沈んでいくので何とか再開したいとのことであった。私たちには資金も権力もないが、学生たちの若い力、エネルギーがある。設備もない仮のものであるが、力を合わせて虎舞の場をつくり、少しでも地域のお役に立てればという想いであった。

私たちの提案が地元住民全てにすぐに受け入れられたわけではない。「竹で何が出来るのだ?」「設備も備品もない建物なんて使えない。行政が建ててくれるのを待とう」という意見もあり、なかなか進まない。そんな時、自宅も父親も津波で失った男性が「私の土地で良ければ使ってください」と自分の土地の提供を申し出てくれた。「できることから少しずつはじめませんか。何もしないと何もはじまらないのだから」と笑顔でおっしゃられたがその奥には相当の覚悟があったはずである。



■みんなで築く

そして震災半年後の秋に約1ヵ月間、延べ70名の学生が自給自足のキャンプ生活を送りながら建設を進めた。旅費も道具も自前の完全ボランティアであるが全国から多くの若者が集まってくれた。志の高い学生が集まっているので結束力も固い。工事はすべて手作業で難航を極めた。急斜面での約1000本の竹伐り。基礎代わりの土嚢600袋16トンの土の袋詰め。約10m高台にある敷地への車路は津波で流されているので資材はすべて人力で持ち上げあげなければならない。竹フレーム構築もすべてロープで縛りあげるので時間がかかる。自主的に朝6時作業開始を申し出て遅れを取り戻してくれた。嵐の中でも泥だらけになりながら黙々と作業を続けた。そして、ようやくフレームが立ち並んだと思ったときに台風直撃を受け、建方途中のフレームはなぎ倒されてしまった。それでも彼らは諦めなかった。

工事中、毎日のように現場を訪れてくれる男性がいた。上棟式の時には真っ先にご祝儀を持って駆けつけてくれたその方が、当初一番反対されていた方だと後で聞いたときは込み上げてくるものがあつた。そして竣工のとき「練習もしていないし道具も不十分だけど俺たちの舞を学生たちに見て欲しい」と地域の方々が震災後初の虎舞を披露してくれた。



■たけとも

建物は出来たけどこれからどうやって維持してゆこうか、高橋さんと話していた時、傍らで聞いていた学生が「“たけとも”という会をつくりませんか」と声を上げてくれた。建設に携わった学生たちが主体となって全国から会員を募り、竹の会所を維持してくれる。

「ひとりひとは小さな力でも、みんなの力を合わせれば大きな力となります。この自力建設プロジェクトを通じてそれを実感しました。この会所を通して、地域の方々と未来を築ける場をつくり続けようと思っています。私たちの想いとみんなの想いが形となり、地域の方々の心の支えとなれば幸いです。」「たけとも」主旨説明として彼らが書いた言葉である。

以来、年数回地域を訪れ、会所を維持し、子どもたちのための“おまつり”を行っている。ワークショップは建物のメンテナンスから始まる。建設以来風雪に耐えているが自然素材ゆえ傷みもある。傷んだ竹を取り替え、緩んだロープを結び直し、建物は元気を取り戻す。それからおまつり準備。毎回必ず大雨に祟られるがお祭り当日はいつも晴れ渡り、子供たちが三々五々集まってくる。イベントと呼べる様な華やかものではないが、学生たちと子供たちが一緒に遊び、走り回り、無邪気に触れ合う姿が印象的である。みんなの顔がほころぶひとときである。今ではすっかり



顔なじみになり、「今度いつ来るの?」という子どもの言葉が嬉しくて、彼らはまた気仙沼に戻ってくる。時間と空間を超えて、ひとつひとつの小さな絆が繋がってきている。

■こころの復興

竹の会所に土地を提供してくれた畠山さんはいつも飾らない口調で私たちを迎えてくれるが、その言葉から被災地に生きる人々の現状と心の中がストレートに伝わってくる。

竹の会所が完成した日、学生たちにかけてくれた一言は「いやー、本当にできたな!出来て良かった。でも、出来なくても良かったんだよ」。このような建物は必要ない、ということではない。肉親を亡くし、自宅も流され仕事場も被災した。やらなくてはいけないことは一杯あるのに頭も体も動かず何にも手をつけられない。そんな時、お前たちの一生懸命汗を流す姿、若い元気な声、それがあただけで元気づけられた。だから建物は出来なくても嬉しかったんだ、という意味であった。

それから一年半が経ち、昨年春の祭り。集まってくれた子供は前年の半分位であったが、畠山さんは次のように話してくれた。「ことし子供たちが少なくて寂しかったかもしれない。でも、それは地域にとっては良い事なんだよ。去年は休みでもどこにも行けずここに来ることしか出来なかった。震災から2年経ち、少し余裕が出てきてGWは旅行に行こう、と遠出する。だからここには来ることができない。つまり、皆が元気を取り戻してきたということだから街にとってはいい事なんだよ。」「だけど、ここにしか来ることができない子供もまだまだたくさんいる。ここに来る子供が一人になったとしても、お前たちのやっていることはすごく意義のあることなんだ。」

地域は津波災害危険区域に指定され建築制限がかけられた。子供たちが将来自分の家を建てたくても許されない。街の未来は多くの困難が予想される。しかし、住民たちにはここでの暮らしがあり生業があり、それぞれの場所で生き活きた人の活動がある。竹の会所に集まる子供たちや地域の人々の表情には生きるまなざしが満ち溢れている。一旦休止した虎舞保存会にも徐々に人が戻り今は震災前の2倍の子どもが参加しているそうである。

震災から3年が経過した。街の復興は進んでいないと言われているが決してそんなことはない。人々の顔には以前と違う微笑みと活気が戻っていることを実感している。

■人と人をつなぐもの

冬は寒いし雨風も凌げない竹の会所は建築と呼べるものではないかもしれない。しかし、嵐の中黙々と築く学生たちのひたむきな姿に地域の人が心を開いてくれ、集まった子供たちの笑顔に学生が癒される。子供たちの笑顔が見たくて学生たちはまた気仙沼にやってくる。こうやって、人は人に支えられている、誰かのために何かしたいと思う心は自然と伝わる、人と人の心はつながるのだと感じた。

「ものづくりを通じて、人と関わること、ものづくりのすばらしさをこんなに身をもって感じたことはなかった。まさに建築の力がそこにあった。竹の会所という建物を楽しむ子供たちの笑顔は言葉では言い表せないくらいの力をもっていた。いずれ竹の会所はなくなってしまうが、子供たちの心に残るような、未来に続く場所を地域の方々と共に作っていただければいいと思う。」これは、竹の会所が完成したとき参加学生が書いてくれた言葉である。

■未来に続く場所へ

竹の会所は4年間の仮設建築である。当時、まちの復旧復興に4年とはかかると言われていたからである。被災した住民に少しでも元気を、という想いで造った建物なので、街が元気になれば役目を終える。逆にいつまでもあってはいけないのである。

「震災はつらい出来事だけど、子供たちが大きくなったとき、ここでの記憶がきっと楽しい思い出として残るんじゃないかな。「津波が来て家が流されたけれど、お兄さんやお姉さんが来てくれて一緒に楽しく遊んだ。そこは竹でできたまあい建物だったな」というように、この場所の記憶がよみがえるだろう。」高橋さんが学生たちに仰ってくれた言葉が心に残っている。

建物は無くなっても人と人とのつながりは時間と空間を超えて伝わってゆく。建築とは人と人をつなぐもの。未来に続く場所であってほしいと願っている。(とうき ひろかず)

「おもてなし」と「もてなし」

東 環境・建築研究所
代表取締役

東 利恵

1959年 大阪生まれ
1982年 日本女子大学家政学部住居学科卒業
1984年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
1986年 コーネル大学建築学科大学院修了
東 環境・建築研究所代表取締役
2006年 AACA 芦原義信賞
2007年 ARCASIA Gold Medal
JIA 環境建築賞
現在、日本女子大学、芝浦工業大学、日本大学非常勤講師

■「おもてなし」と「もてなし」

「お・も・て・な・し」とオリンピック誘致の滝川クリステル氏のプレゼンテーション以来、この言葉はあちこちで使われるようになった。突然「おもてなし」という言葉がいたるところにあふれだしている。

しかし、実際は、今でもサービスの悪いレストランや英語表記が不十分な町、日本語であっても乗り換えさえよくわからないターミナル駅のサインなど、私たちの生活空間すべてに旅人に対しての「おもてなしの心」が満ちあふれている訳ではない。

そもそも「おもてなし」とは「もてなし」が由来だが、客を迎えたときの饗応をさしている。しかし、今は、客のみならず、予見できない不特定な客への気配りや心遣いが日本の「おもてなし」の心だととらえられていることが多い。お迎えする前に、その見えない客に対して、何を求めているか考え、気配りをして対応することなのだ。

もちろん、茶の湯のように客一人一人のために道具や花、時間の過ごし方などを心配りすることは理想だが、不特定な客を迎える宿泊施設ともなると、建築という動かないハードではできないことも多いため、まずは、この施設にやってくるゲストがどういう人たちかを想定することは重要である。そこから分析をして、どう過ごすかを提案する、あるいはどう過ごすことを喜んでくれるかを考えなくてはならない。

また、多数の人に「喜ばれる」とことと「不満を少なくする」ことを混同しやすいが、これには大きな違いがある。たとえば、たくさんのマイナス面をつぶしていく結果、当たり障りのない、面白みのない設計になってしまうことがある。しかし、マイナスをいくら無くしても決して大きな満足を生み出すわけではないし、プラスにすらならない。それよりも、多少のマイナスが残っても、大きなプラスを作ることが大事だと考えている。大きなプラスは大きな魅力であり、その結果「おもてなし」に結びつくとは私は考えている。

■ようこそジャパン

ここで、日本の観光産業についてふれておきたいが、小泉政権から観光立国となるた

めの海外旅行者誘致が始まった。リーマンショックや、大震災などの影響もあり、時間がかかったが、やっと今年、44年ぶりに日本人の旅行者よりも海外からの旅行客の方が多くなった、つまり黒字になった。「ようこそジャパン」の成果が少しずつ実を結んできている。資源のない日本の産業の一つの軸として、今後、観光産業の重要性は建築界の私たちの知っている以上に大きくなってきている。

本来、日本には、訪れる理由となる「文化」、犯罪が少ない「安全性」、数分おきに正確に出発する交通の「利便性」など、旅行産業にとって魅力的な要素をもっているはずなのだが、観光産業のターゲットは日本人の国内旅行、あるいは日本人の海外旅行と内向的な傾向にあった。そのため、日本の宿泊施設も内向きでグローバル社会の変化に対応することもなく、何十年もフリーズした状態にあったように思う。

■日本の宿泊施設の問題

多くの大型旅館は、日本人の団体客が減り、家族単位の個人客に変わってしまったために方向転換をはからなければならなくなったが、不況の中思うような方向転換もできない。アジアからの団体客を受け入れることに活路をみいだせばよいが、多くのさびれた温泉街がこの十数年で増えてしまっている。

一方では、コンパクトなユニットバスとベッドの極小のビジネスホテルが各地の都市にできているが、これは、日本人でも「我慢」「あきらめ」の境地で利用しており、多くのビジネスマンはギリギリまで外での飲食などを楽しみ、寝る時間だけをホテルで過ごす。日本の都市では、こういったビジネスホテルか、高額な外資ホテルに二極化してしまった。金額と広さを考えると、日本の都市ホテルは海外旅行者に必ずしも魅力的なわけではない。

海外のホテル事情を見ると、洗練されたデザインのホテルがアジアの各地にできおり、外資系ホテルの新しいブランドも日本ではなくアジアから展開しているものも多い。また、ツーリストクラスのホテルにしてもアジアの都市圏にも負けている状況にある。

土地代や工事費が高いから、狭くなる、高くなるという理由をのべたところで、海外からの旅行者が納得するわけではないし、日本の魅力として感じるわけでもない。

我々ができることは、西欧型のホテルと同じ土俵で勝負することではなく、独自のカテゴリーを作り出し、日本としての魅力を打ち出すことではないだろうか。

■「星のや」

そんな状況の中、「星のや軽井沢」を設計した。クライアントとともに、まずは、日本の進化する宿泊施設のあり方を議論し、この敷地の持つ魅力とは何かを見つめ、どのようなゲストのために建てるのかを考えた。

クライアントからは、「西欧に媚びない」でほしいということを最初に言われたが、それは、「日本」としての個性をどう表現するかを問われたことだと理解した。

自然豊かな、川の流れる谷間の空間は「日本らしい風景」ではあるが、「日本の田舎のどこにでもある風景」とも言えるわけで、特別に魅力のある個性ではない。宿泊施設にとっては、日本各地にある「美しい風景」のままでは来てもらうための理由としては不十分なのだ。「富士山」のような強力な魅力のある地域でない場合、設計によって強力な個性を作る事が必要なのである。



星のや軽井沢 撮影：藤塚光政

「星のや軽井沢」ではここでしか体験のできない風景、空間とするため、既存の大きな樹木や土地の傾斜を土地の個性と考え、魅力づけのために利用した。水力発電の沈砂池を修景に使い、最大限に魅力の表現として利用していった。

その結果、修景の池を中心に切り妻屋根の

連なる客室群が集落のようにたたずみ、「星のや」の建築や自然が魅力ある風景となることを目指している。

■文化や土地の魅力

「星のや京都」「星のや竹富島」についても、その土地の持つ歴史や自然がその土地の財産として考え、それをどうデザインに取り込むかが設計チームの大きな目標となっている。

「星のや京都」では、既存の木造旅館を、新建材やアルミサッシを取り外し、京都を中心とした日本の伝統的技術で、本来の建物がもつ魅力を引き出し、また、同時に、現代性をうまく取り込む事でどの国の人にもわかりやすい日本旅館にすることを考えた。

例えば、和室には、海外の方や畳に不慣れな若い世代でも寛げる家具を考えるなど、古き良き物を現代に合わせて進化させることを考えた。



星のや京都 撮影：吉田誠



「星のや竹富島」では重要伝統的建造物に指定された既存集落の魅力をこの島の最大の個性ととらえ、その集落のマニュアルに沿いながら、一方ではリゾートとしての居心地の良さを考えながら設計している。無国籍になりがちな南の島のビーチリゾートで



星のや竹富島 撮影：ナカサアンドパートナーズ

はなく、この竹富島の文化と過ごし方がゲストにとっての一番の魅力となることを考えた。

■おもてなしの時間

この結果、「星のや」では、リピーターが多くなり、また、滞在日数も増えている。

「滞在型」のリゾートを考える場合、魅力的に「過ごす」空間が必要となる。リゾート内を歩き回れば、景色のよいところには椅子が置いてあったり、客室には、くつろぐための場所があちこちに想定してあったり、パブリックにはラウンジではなく、パブリックリビングがあったりとあちこちに時間を「過ごす」ためのいろいろな個性の空間が用意されているのである。

こういった空間があることによって、オペレーター側は、池に行灯を浮かべたり、パブリックリビングにおやつを用意したり、庭で茶会を催したりと、いろいろなソフトでおもてなしの時間を作る事ができ、滞在の魅力は巾を広げる相乗効果となっている。

■文化でおもてなし

日本では今まで昼間はあちこちの観光地をめぐり、宿には食事と睡眠のために立ち寄るという周遊型が主であった。そのため、客室は寝室としての設えであり、少しでも広ければ、応接セットのようなソファが置いてあるのが定番だった。

しかし、現代の日本の住宅はコンパクトであっても、建築家の工夫で住みやすく高品質なデザインが広がっている。こういった住宅設計の日本の独自な展開に比べ、宿泊施設では、まだ、昔からの周遊型観光の枠を越えることがなかなかできていない。そこには私たち建築家がこれから提案していく余地がたくさんあるはずである。海外の観光客にとって魅力的なのは「日本らしさ」なのだから。

三つの「星のや」の場合には、その土地の持つ文化の魅力と新たな日本らしさの進化を表現したいと考えた。建築からサービスまで、すみずみまで、同じ方向を向いた姿勢が大事であると考えている。

その結果、「日本的」な個性ある宿泊施設になることができれば、海外からの旅行者への大事な「おもてなし」になると考えている。

(あずま りえ)

編集後記

建築計画系分科会

時間は建築のあり方そのものに深く関わっている。この時間と建築との関係について、様々な視点から検証しよう、ということが本特集の目的であった。最前線で活躍される諸先生方の論考は、私たちがこれからの建築のあり方を考えるうえでの、様々な示唆を与えてくれたように思う。時間の中で生きる私たちは、時間というものが、自分たちのみに関係のあるものではないことを意識しながら、建築にたずさわる必要があるのだ。ところで最近、時間が足りなくて私は大変困っている。私の能力不足が原因のようだが、この難問もやはり時間が解決してくれるのだろうか。

(渡部 剛)

建築は「築〇年」と言われるように時間経過と密接な関係にある。これには物理的時間に加えて時代という社会的時間も含まれる。「建築と時間」とは何か？ 特集の編集会議はこの問い掛けから始まり、建築の寿命、耐久性、現在・過去・未来の時系列、人が建築で過ごす時間等、様々な捉え方をあぶり出した。総論の内藤廣氏の論考では、建築は異なる寿命を持つ素材の集合体であることや、経済活動・情報化社会からの視点、そして体験や記憶の観点に及び3.11へと導かれる。建築と時間はハードからソフトまで切り離せない関係であることを痛感した。この特集の読者が「時間」をより意識して建築に取り組むきっかけになればと思う。

(神戸嘉也)

建築にはいくつもの時間がある。できあがった建物は時とともに古びてゆく。味わいが増したと言われることもあれば、さびれてしまったと言われる場合もある。できたときには要求を満足していても、クライアントや社会の変化に応じて、建築にも変化が求められることがある。当初の用途とはまったくちがう用途で使われ、建築としての価値が増す場合もある。

都市とは、このような建築の時間の集積と行うことができる。すでに取り壊された名建築も、人々の記憶の中に生き続けることもあるだろう。建築の時間は実に多様なのだ。

今回の特集も建築と時間のさまざまな関わりを映し出す興味深い論考が集められたと思う。

(下坂浩和)

建築と時間について考えるとき、設計者とは概ね第三者である。自邸や自社ビルでも設計しない限り、設計した建築を過ごし切ることはいできないからだ。私の頭にまず思い浮かぶ身近な時間とは、業務の中の慌ただしい時間。その中でこれから過ごされる時間を想像することになるのだから、内藤氏が述べているように「その人の中に蓄積された時間」が建築を大きく左右することは見過ごせない。設計チーム内で、或いは施主との間でギャップが生まれるとき、蓄積された時間の差異によるものが大きいのかかもしれないなどと思いつつ、改めて気を引き締めされた次第である。

(大西広朗)

今回の「建築と時間」というテーマは、非常に奥が深く、かつ難しいテーマだったと思う。建築における時間には、設計者だけでなく、建築自体、利用者、メディアなど限らない切り口が存在する。中でも私が一番興味を抱いたのは、建物そのものの「生」と「死」という視点だった。人と同じくこの世に生まれ、20〜30歳と短命に終わる建築もあれば、100歳を超えた後に、更なる新たな人生が続いていく建築もある。生き続ける建築は、人々に愛され続ける価値と力を備えている。このように幾世代にも渡り愛される建築を創ること、「時」がデザインした価値を未来へと継承していくこと、という建築の原点を見直すことができたと思う。

(静 茂夫)

このテーマを通じた議論と各論考は、建築が人間や社会の生きる「時間」に密接に関わり、「生きられる」舞台として、モノ以上の意味を持つことを改めて考えさせられる機会だった。個人が感じる生身の小さな時間もあれば、社会・歴史全体の中に流れる大きな時間もある。関わる時間軸の広さもまた、建築の側面であり魅力でもあるだろう。それはつまり、建築の創り手である我々に捕らえるべき射程距離の大きさを伝えている。

「建築なら、人の生きる時間を幸せにできるかも知れない。」そして「自分よりも長い時間世界に貢献してくれる。」

建築を目指そうと思った幼い日に持ったその二つの直感が蘇ってくるようだった。

(三谷帯介)

有形な建築と無形な時間をつなぐものは、やはり人間の感覚、記憶、体験が大きな意味をもっていると、今回の特集を通じて再認識させられた。また、特集には時間に対する切り口が多様で面白く、私個人としては4年程前に取り組んだ卒業設計にて、時間の経過を可視化し、建築と共存させることを試みたのだが、その際に時間について頭を悩ませた当時の記憶が蘇ってきた。刻一刻と過ぎていく時間の中での建築の意味、過去・現在・未来への創造力、リセットしてはいけない記憶など、時間という要素を付加することで建築を考える上での幅が広がった特集だったように思う。

(矢野展寛)

「建築と時間」という、一見抽象的にも思える特集ではあったが、各論のテーマ設定とも相まって、非常に幅広い論考が集まったと思う。個人的には常日頃から、時間の経過に耐える建築を設計したいと思っているが、内藤論考によれば、それは現代の資本主義や消費社会を否定することだというし、瀬川論考では、経済論理に振り回される建築の有り様が赤裸々に描かれている。それでも、建築する人間が時間と向き合おうとすることが、ただの独りよがりだとは思いたくない。構造基準や確認申請など現行制度の見直しも含めて、松隈論考のテート・モダンのように、時間と共にある建築の価値を認める社会であって欲しいと、みなさん思いませんか。

(米山剛史)

昨年、27年前に設計した建築を訪れる機会があった。兵庫県中央部のとある農村にたたずむその建築は、時間の経過とともに古びながらも深い表情を湛えて私を迎え入れてくれた。竣工時に植えた木々は大きく成長し、建築と一体とならずずっと以前からそこにあったような風景を醸し出していた。施主によって磨き込まれた柱は、日々の営みの繰り返しによってしか得られない艶を保ち、あらためて時間が建築に与える影響を肌で感じる事ができた。この時の経験がきっかけとなり、今回のテーマを発意するに至ったのであるが、「時間」に対する様々な論考により、実に奥の深い充実した特集になったように思う。ご執筆いただいた皆様に感謝の意を表したい。

(野田隆史)

歴史的資源を活かした 魅力あるまちづくり

斑鳩町歴史的風致維持向上計画

柳井孝一郎

斑鳩町役場都市建設部観光産業課観光工商係長

平成20年11月に施行された「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（通称：歴史まちづくり法）」に基づき作成した「斑鳩町歴史的風致維持向上計画」（以下「計画」という。）が今年2月に国の認定を受けた。

認定は、奈良県の市町村では初めてで、全国では44番目となる。事業期間は平成26～35年度の10年間である。

この計画に基づき斑鳩町が持つ歴史的資源を積極的に活用した魅力ある固有の「歴史まちづくり・観光まちづくり」を推進することとした。

仏教文化の中心地として一躍脚光

本町の歴史は古く、古墳時代には、世界的に有名な藤ノ木古墳が造営され、飛鳥時代には、聖徳太子が飛鳥から斑鳩宮に移り、法隆寺を建立されたことにより、斑鳩の地は仏教文化の中心地として歴史的に一躍脚光を浴びることとなった。

中世以降は、太子信仰の中心地となり、集落の成立にも大きな影響を与えた。近世に入ると、法隆寺の門前のほか奈良街道に面した交通の要所であった竜田村では、市が開かれ、商店が建ち並び、宿場町として栄えた。

このように法隆寺と龍田神社を中心とした沿道の賑わいは明治時代以降も続き、龍田川付近は、戦前まで行楽地として賑わった。

昭和30年代以降は、住宅開発が盛んになり、農業を中心とした集落から郊外住宅地へと変貌をとげるが、平成5年には「法隆寺地域の仏教建造物」が日本で初めて世界文化遺産に登録され、豊富な歴史文化資源を持つ斑鳩町の魅力が再評価された。

策定に至る経緯

本町には、多くの社寺などの歴史的、文化的資源があり、世界遺産のバッファゾーンと

なる矢田丘陵の豊かな自然環境と平野部に広がる田園風景、それらと一体となって「斑鳩の里」の景観を形成する地域の人々の営みや拠点となる歴史的価値のある建造物や町並みなど多くの重要な地域資源を有する。

しかし、近年、少子高齢化や商業の集積地域の変化などにより、法隆寺地区や龍田地区の旧街道筋の古くから栄えてきた商店街の衰退とともに、歴史的な町並みやそれらを構成する歴史的な建物も、空き家のまま放置されているものが見受けられるようになった。

また、老朽化により取り壊され周囲の町並みに不調和な建物に変わってきているところがある。

加えて、本町の観光形態は長年の課題である法隆寺を中心とした拠点通過型観光が主流であり、1年間に約90万人もの観光客が訪れているにもかかわらず、地域経済への波及効果が非常に少ない。

これらの課題を解消するために、本計画の策定に至った。

計画の概要

計画の核となる7つの歴史的風致

本計画の核となるのが、歴史的風致である。『地域におけるその固有の歴史および伝統を反映した人々の活動』と「その活動が行われる歴史上価値の高い建造物およびその周辺の市街地」とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境である。

本計画では、7つの歴史的風致がある。

●受け継がれてきた仏教信仰

- ①西円堂の鬼追式
- ②聖霊院のお会式
- ③西室の夏安居と法隆寺夏季大学

●暮らしに息づく歴史と文化

- ④斑鳩神社の秋祭り
- ⑤西里の愛宕講など民間信仰
- ⑥龍田神社の秋祭り
- ⑦吉田寺の放生会

■法隆寺を中心に約82haを重点区域に

歴史的風致の維持及び向上を図るための施策を重点的かつ一体的にすすめていく特に必要な区域が重点区域である。

重点区域は、法隆寺を中心に西里、東里、三町、五丁町を含めた約82haである。

■重要建造物を歴史的風致形成建造物に

重点区域内で歴史的な意匠や技術が良好に残り、地域の固有性や希少性を備えた重要な建造物を歴史的風致形成建造物と位置付け、次の3件を指定候補とした。

- ①井上家住宅（旧北畠治房男爵邸）
- ②安田家住宅（江戸時代の大工棟梁家）
- ③辰巳家住宅（登録有形文化財）

歴史的風致の維持向上事業

歴史的風致の維持向上を図り、魅力ある固有のまちづくりを実現するため、歴史的価値のある建物の修復や空き家対策、道路の美装化や無電柱化などの公共施設の整備、そして、歴史文化の啓発、文化財の展示等の17のハード事業とソフト事業を組み合わせている。

10年後の実現を目指す

本計画が国の認定を受けたことで、「まち」そのものを観光の対象とした、散策・回遊・着地型の「まちなか観光」に移行し、観光客に、世界遺産のある本町固有の歴史的な町並みや景色を楽しみながら歩き、さらには昔の街道筋のように地域の方々にも賑わいと活気を取り戻してもらえるべく、歴史的資産を維持活用した地域の活性化の準備ができた。

まちづくりには、地域の方の協力が必要不可欠であり、地域と行政が密に連携を図りながら、10年後の魅力ある固有の「歴史まちづくり・観光まちづくり」の実現を目指すこととした。



歴史的雰囲気に残る町並み

今後の課題

今日まで、法隆寺周辺をはじめとする重要な地域は、古都保存法や風致地区条例などの法や制度的な規制と地域の人々の努力によって、良好な市街地環境や自然環境が維持されてきた。

しかし、店舗部分の床面積が50㎡以下の兼用住宅しか立地できず、単独の店舗が建てられないなどの規制が地域活性化につながらない大きな要因であった。

このことから、建築物の規模や意匠・形態の規制は維持しつつ、用途の規制緩和のみを行い、まちあるきを楽しむための店舗等の立地もできるよう、現行の用途地区の補完を図る「特別用途地区」を定める予定をしている。

最後に、先人により大切に守られてきた貴重な地域資源の保全と活用のバランスをうまくとることで、「歴史を感じながら、観光も楽しめる」魅力ある斑鳩町になると確信している。（やない こういちろう）

●柳井孝一郎

昭和54年生まれ。関西大学卒業。平成14年4月斑鳩町役場入庁

大阪府立大学の 新世代植物工場

小倉東一

大阪府立大学植物工場研究センター
統括コーディネーター

福田弘和

大阪府立大学工学研究科准教授

発展期に入った植物工場

植物工場は、人工光源だけで栽培される人工光型、太陽光だけで栽培される太陽光型、日射量の少ない時に、人工光で補光する併用型の3つのタイプに分かれる。それぞれ長短所があるが、ヨーロッパでは併用型、日本では人工光型が多い。太陽光型と呼ばれるものは、従来の温室栽培と異なり、より高度な環境制御や自動化機器が設置されたものを指している。1985年つくば科学博にて「植物工場」と命名した人工光源だけでレタスを栽培するシステム展示が行われ、日本での植物工場のルーツとなっている。今では人工光型だけでも、北海道から沖縄まで全国的に分布しており、その数は50か所を越え、黎明期から発展期に入ったと云える。

生産品目は葉菜類に限定されているが、無農薬・虫や砂など異物混入がない・洗わないで食べられる低細菌であるなど、サラダやサンドイッチ素材として清浄性、安全性に優れている。栄養価や機能性も抗酸化活性や総ポリフェノール・カロチン・ビタミンなどが、ハウスや露地栽培に比較し、より多く含まれている点などが、消費者から評価され多少割高であっても、スーパー店頭で工場野菜と意識して購入される時代になってきている。

新技術満載の新世代植物工場

大阪府立大学では人工光型に特化し、要素



図1 大阪府立大学GREEN CLOCKS新世代植物工場 外観イメージ

技術開発やラボ規模での実証を産学連携で推進しており、その集大成として日産5,000株規模の実証施設（建築面積1,300㎡、鉄骨構造、2階建）が、2014年8月稼働開始の予定である。図1に外観イメージ図、図2に施設イメージを示す。

数々の新技術が搭載された最新鋭の新世代植物工場と云えるが、主なものとして①苗診断ロボットシステム（歩留まり向上）②自動化栽培システム（省力化）③栽培光源の完全LED化（省エネ化）④最適空調システム（室内環境均一化）が挙げられる。

苗診断システムは、高感度・高解像度の冷却CCDカメラとクロロフィル励起用の青色LEDから構成され、青色LED光を励起光として、植物体のクロロフィル色素を励起させる。クロロフィルから生じる蛍光を4時間毎に1日に数回撮影し、①個体サイズ②形状の形態データ③クロロフィル蛍光強度④概日リズムの振幅⑤概日リズムの周期を算出する。これらを苗診断に関する基礎データとし、所定の評価関数を用いて苗の優劣性を数値化し、優良苗だけを育苗用のパネルに自動定植する世界初の試みである。

自動化栽培システムは、栽培棚への栽培パネルの装架から、栽培棚内での水平移動、栽培棚から包装出荷作業エリアまでの搬送を自動化し、生産ゾーンの無人化を実現させようとするものである。具体的な動作としては、苗がセットされた栽培パネルを定植側（ローディング部）の各栽培棚に、毎日2トレイずつ載せてやり、18日間かけて、収穫側（アンローディング部）へ、バッテリー駆動のシャトル型搬送ロボットによって野菜が水平移動するものである。このローディング動作も、各栽培棚へ自動的に装架できるよう、高さ方向に移動するリフターと送り込み機構を搭載しており、アンローディング動作も、栽培棚からの自動取り出し機構と、リフターが装備され、出荷調整を行う作業室まで、野菜が搬送機構によって自動搬送される。これによって栽培レーンでは、基本的に無人化の状態が実現できている。

栽培光源の完全LED化は、従来光源である蛍光灯の寿命の短さや、より省エネルギー化が課題となっていることから、育苗から栽培まで全てのエリアでLEDを光源として採用することにした。近時、器具の低コスト化も急速に進展し、実用化の時代に入ってきた。当センターでも、光質が栽培に与え

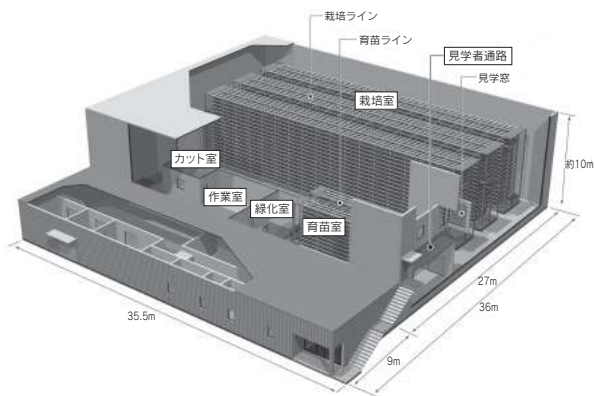


図2 大阪府立大学GREEN CLOCKS新世代植物工場施設イメージ

る影響、植物光源用として最適なLEDセレクションなどを展開してきた。それらの成果を踏まえ、新世代植物工場においては、量産規模による日本で初めて採算の取れるLED植物工場の実現を果たしたいと考えている。

最適化空調システムは、高さ9mの栽培室内に18段の栽培棚が複数設置されることから、栽培空間の温度の均一化を、経済的コストでいかに実現するかの、一つの提案である。従来の天井部に分散型室内機設置で課題となっていた上下で5℃もの温度差が生じていたものを、集中式エアハンドリングユニットと各棚へ空調空気を直接送り込む吹き出しダクト設置で、その解決を図ろうとしている。

ハードの新技術について触れたが、栽培技術やマーケットと直結した商品開発や販売手法など運営に関わるソフト技術や専門技術者の人材教育の充足も、業界発展のためには重要となってくる。この観点から、大阪府大でも学生や社会人に対する教育カリキュラム構築の準備が進められている。

建築業界への期待

植物工場新設では、建屋新築も必要となる。そこでは、植物工場の特性（9～10mにもなる天井高、20mにもわたるワイドスパン、換気や排水設備まで含んで建屋の微細な虫侵入防止対策）との調和した建築が求められる。倉庫仕様で建設した建屋内に設備エリアを断熱パネルで仕切る工法より、断熱パネル機能を建屋自体が兼ねる方が経済的である。今後、栽培設備のモジュール化も進展してくるであろうが、建屋のモジュール化やシステム建築化も積極的な取組を期待するところである。

（おぐら とういち／ふくだ ひろかず）

●小倉東一

1988年から企業で新規事業として植物工場事業化に従事。2010年から現職。日本生物環境工学会監事。

●福田弘和

専門分野：植物体内時計研究。本施設では、苗診断システムを担当。日本生物環境工学会理事。

滋賀県庁舎

桐浴 邦夫

再読

関西近代建築
モダンエイジの建築遺産

■歴代庁舎

明治維新によって誕生した滋賀県は、明治元年1月16日、旧大津代官石原邸に大津裁判所が置かれたことに始まる。やがて大津県と称され、廃藩置県によって滋賀県となった。その大津裁判所は今の浜大津駅付近にあったという。その後、明治2年、別所の円満院、つまり現在の三井寺山内の円満院の殿舎に県庁機能を移転し、明治21年の東浦の庁舎（現在地・旧庁舎）ができるまで、使用されていた。

この東浦の旧庁舎であるが、明治19年に滋賀県の技師を務めていた小原益知によって設計されたもので、構造および意匠面において、日本で最初の本格的な洋風庁舎の例として知られている。竣工は明治21年6月である。当時の中井知事も大変興味を持っており、小原の技術室に来ては設計の注文をしたり、建築の話聞いていたそうである。十字形平面の左側を県会議事堂、右側を警察部とし、中央上層に公式行事や公賓の接遇等を行うための特別な部屋として正庁を置いた。じつはこの正庁、日本で最初のものであり、さらに現在に至るまで、その姿を辛うじてとどめているものでもある。後述したい。

構造は煉瓦造二階建てで屋根は瓦葺、そして壁は煉瓦に淡黄色の漆喰を塗り、石造と擬せられる意匠としていた。

当時の姿は写真の断片で知ることができるが、全体としてルネサンス風の意匠と言えよう。玄関の車寄には三連のアーチがかけられ、その上にはコリントの柱頭を持つ大オーダーのピラスターが立ち上がり、上部に三角形のペディメントを載せる。二階の上げ下げ窓の

上には、中央に三角の、そして両脇には楕形のペディメントが並んでいる。

なお設計者小原益知は、工部大学校三期生で、内務省土木局に勤務し、このとき滋賀県に出向してきた。また琵琶湖疏水の諸施設のデザインに協力した建築家であった。

■新庁舎建設経緯

明治21年の旧庁舎は、大正11年、昭和7年に増築されたが、根本的に建て替えて、床面積を増やす計画が昭和10年頃に台頭してきた。

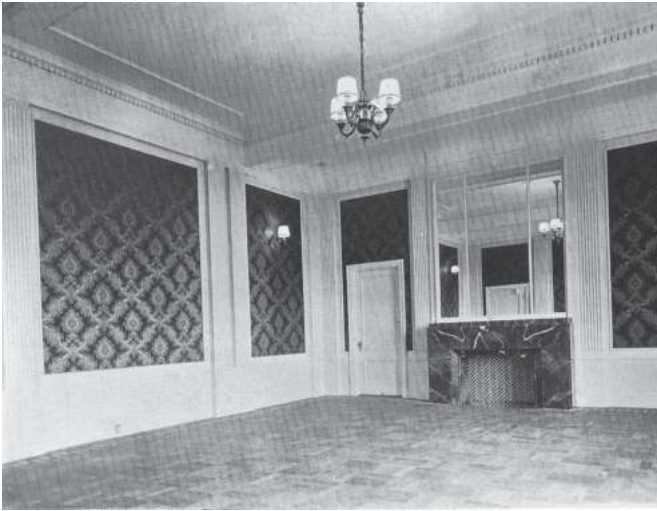
このとき京都帝国大学教授の坂静雄が、耐久力に関して意見を述べている。すなわち、この庁舎は明治24年の濃尾地震以前の建物であって、耐震的な考慮がなされていないもので、現状においても破壊的な亀裂が存在している。大地震を待たずとも、局部的な小地震においても壁体の崩落は免れない、と断言する。また補強方法として鉄筋コンクリート造による提案もなされるが、それに対しては経費が割高で利便性も低いと述べる。すなわち新築を薦めていることになる。さらに坂はここで興味深い提言をしている。それは構造の話ではない。つまり正庁の保存を講ずべき、だというのである。明治天皇が訪れた場所である、という理由であるが、部分保存という考えは、当時としては画期的なものであったと言える。耐震耐火の記念館または記念室を設けて、そこに部屋を再現するという案であった。

昭和11年になって、議会において議案が通過し、建築計画が急激に進んでいくことになった。

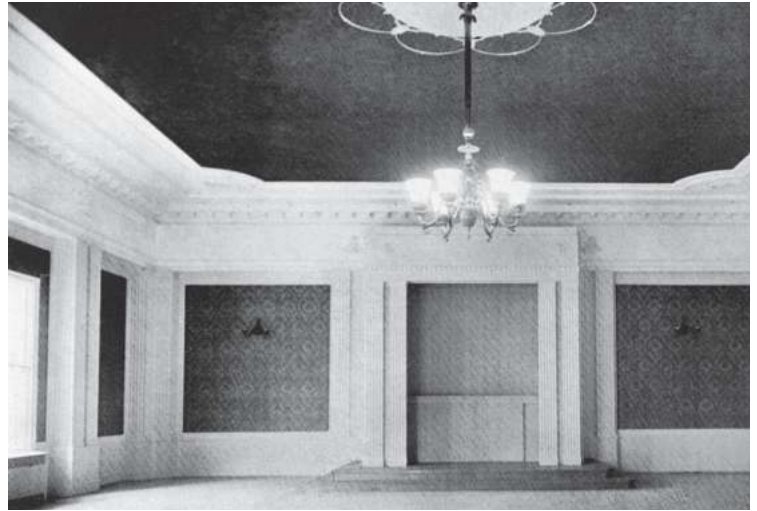


①北側（琵琶湖側）正面外観 平成26年6月 撮影：桐浴邦夫（以下※印）

所在地／大津市京町4丁目1番1号
設計／佐藤功一・國枝博
施工／大林組
竣工／昭和14年4月
構造／鉄筋コンクリート造
規模／塔屋付4階建、地下1階
種別／庁舎



② 貴賓室



③ 正庁 新庁舎にも正庁が設けられた



④ 議事堂



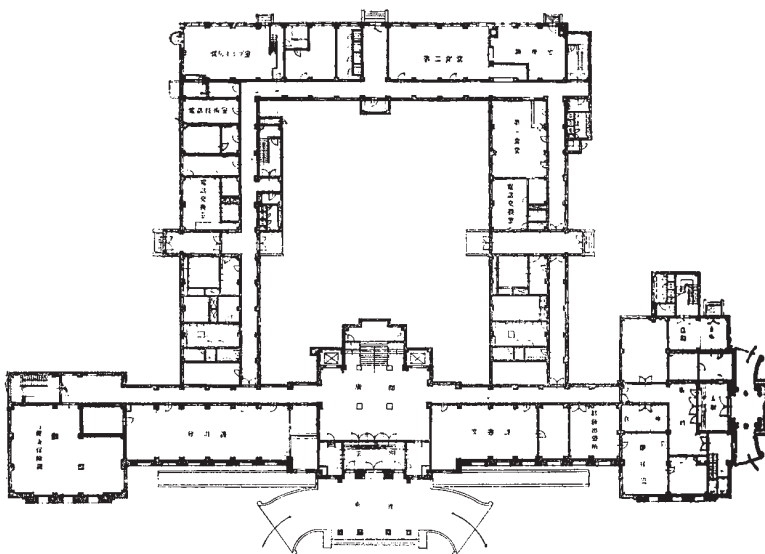
⑤ 参事会室



⑥ 知事室



⑦ 部長室



(一階平面図)

⑧ 一階平面図

「建築と社会」第22輯第6号（昭和14年6月号）より



⑨玄関車寄 ※



⑩大オーダーのピラスター柱頭 ※



⑪貴賓室 照明器具はのちのもの ※



⑫階段室 踊り場にはステンドグラス ※



⑬旧正庁出入口コーニス 上部に菊花の装飾 ※



⑮知事室ピラスター柱頭 ※



⑭旧正庁出入口ピラスター柱頭 ※



⑯知事室 照明器具はのちのもの ※

■設計者 佐藤功一と國枝博

設計者の佐藤功一と國枝博は、かねてよりの平知事の腹案であったという。昭和12年3月に正式受諾し、同年7月に設計が完了した。そして工事請負人の入札を行ったが、県の期待に反したもののばかりであった。計4回行ったということであるが、結局落札をみることはなかった。最終的には随意契約を大林組と結ぶに至った。

さてここで、設計者である佐藤功一と國枝博について一瞥しておこう。

佐藤功一は、明治11年に栃木県に生まれ、東京帝国大学建築学科を卒業し、三重県技師、宮内省工匠寮に勤務し、欧米各国を視察し、帰国後の明治43年、早稲田大学建築学科の創設に関わり、翌年教授となった。以後、東京女子高等師範学校や日本女子大学において教鞭を執り、昭和16年永眠する。作品は多岐にわたるが、行政施設としては、群馬県庁舎（昭和3年）、米子市庁舎（昭和5年）、宮城県庁舎（昭和6年）、栃木県庁舎（昭和13年）などがある。

これらの作風をみると、シンボリックな左右対称の意匠、そして2～3階を貫く大オーダーのピラスターが特徴である。このピラスターは先代の小原設計の庁舎にも付いていたものである。佐藤がアーキテクトの大先輩、小原の意匠を意識したのかも知れない。

國枝博は明治12年、岐阜県に生まれ、東京帝国大学建築学科を卒業し、明治40年より韓国統監府技師となった。このとき明治43年より欧米各国に出張する。そしてドイツ人建築家ゲオルグ・デ・ラランデの元で朝鮮総督府の建築にかかわる。特にデ・ラランデは大正3年に死去するが、そのあと野村一郎と共に設計を引継ぎ、大正15年に竣工させた。ただし國枝は技師としてではなく、独立した建築家としてである。すなわち大正7年には依願退職し、同8年には大阪に國枝工務所を開くのであった。主な作品には、大阪農工銀行（現八木通商、昭和4年）大分県農工銀行（現みずほ銀行大分支店、昭和7年）などがある。没年は昭和18年。

佐藤功一と國枝博、両者がこの滋賀県庁舎の設計において、どのような役割分担をしたかは厳密には不明である。ただ『滋賀県庁舎改築記念誌』によると、昭和12年4月2日には、「佐藤博士のエレベーションが確定したので、國枝氏の来庁を求め、更に各階に付て詳細検討を加へた上、細部の設計に着手さるゝこととなった。」との記録があることから、立面は佐藤功一が、そして平面や細部は國枝博が担当したものと考えられる。

■滋賀県庁舎概要

鉄筋コンクリート造四階建ての建物には中央に塔屋が立ち上がり、四階の屋根まで20m、塔屋上部まで35.4mの高さをもつ。

建築様式は『滋賀県庁舎改築記念誌』によると「新日本近世式」とあるが、基本はいわゆるルネサンスである。しかしより正確な様式の表現と言うより、むしろ時流に沿った、簡素化したものであり、オリジナリティーを含むデザインとみることができる。特に大オーダーのピラスターは簡略化した意匠となっている。そして正面の柱頭部分は佐藤オリジナルであり、栃木県庁舎と類似のデザインであることが指摘されている。また車寄の柱では柱頭が省略されており、様式建築の否定の気運が高まる1930年代という時代を感じさせるものである。

平面はいわゆるロの字形を基本とし、北側の琵琶湖側を正面として、西側に議事堂関係の諸室を配している。中央にひときわ高く立ち上がる塔屋は記念室として旧庁舎の二階正庁を原形のまま移築している。

外部の仕上げは、下部に人造石の小呷仕上げブロック張り、上部はスクラッチタイル二丁掛け張り、ピラスターは小呷人造石ブロック張り、軒回りは人造石洗い出し、塔屋は人造石洗い出し一部タイル張り、中庭まわりはモルタル塗り刷毛引き仕上げ、上部がリシン吹き付け仕上げである。また車寄の壁には花崗岩が使用されている。

内部は1階ホール、廊下は床を人造石研ぎ出し、腰壁テラゾーブロック張り、上部白漆喰塗、天井コルク吹付け一部白漆喰塗としていた。中央の階段室には、床や腰にテラゾーブロック張りで天井は漆喰塗、踊り場にはステンドグラスがはめ込まれ、中庭からの自然光が採り入れられ、平板な建物に彩りを添えている。階段手摺の壁面には、テラコッタの装飾が施されている。信楽に開設された県立窯業試験場（現 信楽窯業技術試験場）で制作されたアカンサスのレリーフである。

3階東側に設けられた知事室は、構造の梁をそのまま現した天井のデザインが特徴である。床は寄せ木張り、壁面にはチーク材の羽目板ステイン仕上げ、隣の別室（現在の知事室）との境には、コリント風のピラスターを備える。

西側3階には県会議場があり、中2階すなわち4階部分が馬蹄形に傍聴席となっている。演壇背面の壁はチークベニア板張り、床はゴムタイル張りとなっている。

4階北側中央に貴賓室がある。床は寄せ木張りで腰羽目板がチーク材で、大理石の暖炉を設けている。付属の化粧室や便所には信楽

のタイルを使用する。

新しい正庁もつくられた。ピラスターが双柱柱となっているのが特徴で、床がゴムタイル張り、腰羽目板が檜のベニア材ペンキ塗り仕上げ、框は檜材、天井はコルク粉吹付けペンキ仕上げである。正面には御真影を奉安する金庫を備えている。しかし現在では実用的に変更され、天井や壁面など大きくその姿を変えている。

この新庁舎にはベニア材が多く用いられている。各室の扉も当初はラワン材の予定であったが、途中でベニアに変更されている。これは当時、新しい材料としてベニアが脚光を浴びていたものであった、ということに注意しておかなければならない。

■旧正庁の保存

明治21年竣工の建物の内、旧正庁が現在まで保存されている。但し現在では、会議などの部屋として使用され、また二部屋に分断されている。

正庁とは儀典室のことで、要人を迎えるための部屋で、全国に先駆けて設けられたものである。この部屋は、明治23年に琵琶湖疏水の開通式のときに明治天皇の御座所となり、また明治43年には後の大正天皇が皇太子の行啓時に使用した場所である。昭和のこの庁舎の建築に際して、坂静雄が述べていたように、聖蹟の保存という意識が大きくはたらいたという。

昭和14年の竣工当時には、記念室と呼ばれ、床や腰羽目板などが櫟材で仕上げられ、壁は緞子張り、天井は漆喰塗カゼインペイント（牛乳由来の塗料）仕上げであった。現在ではすっかりと様変わりしているが、一部にその面影を伝えている。注目したいのは出入口の装飾である。ピラスター上部はコリント式の変形とも見える柱頭があり、何段にも重ねられたモールディングの施されたコーニスの上には、菊花の装飾を戴く。

現在の保存の概念とは違うが、旧建築物の一部を保存し、それを組み込んだ建築の設計は、大きく評価されるべきものと考えられる。

主要参考文献：

- ・『建築と社会』昭和14年6月
- ・『建築世界』昭和14年9月
- ・『滋賀県庁舎改築記念誌』昭和16年
- ・『建築と社会』昭和18年9月
- ・石田潤一郎『都道府県庁舎 その建築史的考察』平成5年、思文閣出版
- ・鈴木裕士他「栃木県庁舎と佐藤功一の近代的視線」『日本建築学会学術講演梗概集』平成7年8月

（きりさこ くに／京都建築専門学校）

荻野 寿也

—OGINO TOSHIYA—



「三井ガーデンホテル京都新町 別邸」にて

経歴

1960年 大阪府生まれ
1988年 大阪府立今宮工業高等学校建築科 卒業
家業である荻野建材入社、同緑化部創設
2006年 荻野寿也景観設計開設

主なプロジェクト

2005年 「介護老人保健施設伊賀ゆめが丘の庭」(上野建築研究所)
2010年 「アトリエ・ビスクドール」(前田圭介／UID)
2012年 「南与野の庭」(伊礼智設計室)
2014年 「三井ガーデンホテル京都新町 別邸」(竹中工務店)
2014年 「群峰の森」(前田圭介／UID)

受賞歴

1999年 自邸が「第10回大阪府緑の景観賞」受賞
2013年 長野県松本市景観賞受賞

境界

今回は造園家の 荻野寿也氏に、ご自身が中庭を手がけられた、三井ガーデンホテル京都新町 別邸にてお話を伺った。

「原風景を再生するような庭を創りたい」

その土地が宅地化される前の森や草原をイメージし、そこに建物が舞い降りた様にしたいと言う。

建築という行為の原点が自然を切り開き人工物を構築することであれば、その試みは原始の建築の姿を取り戻すことに他ならない。

現場施工管理の仕事に6年間つき、その後、家業の建材店を継ぎ、氏の代からはゴルフ場の造成の仕事をしていたが、設計工房CASAの坂本昭氏設計による自宅の建設をきっかけに造園の仕事に興味を持ち、造園を手がけるようになった。

当時は、アメリカランドスケープか和風庭園の両極端しかなかったが、前者が木を人工物の様に均等に並べたり、後者が飛石などを大道具的にわざとらしく設けたりするのが不自然で、建築デザインとも整合していない様に氏には見えた。地産植物を多く用い、自然な本来の地形の稜線を復活させることにより、もっと地域性や気候に沿った庭園、建築に寄り添う様な庭園を目指した。

また、造園業界が建築を敵対視しているかのような雰囲気を感じているという。工学系の建築家と農業系の造園家、それぞれにとっての「良いデザイン」が異なる。例えば、造園家は植栽の種類や配置には注意を払うが、縁石などはコンクリート製の既製品を使ったりする。

造園にも、特にその建築との境界に、建築のディテールの様に緊張感のある、同じ「精神性の高さ」を求めたいと言う。建築施工管理の経験が、この建築への知識・造詣の深さに繋がっている。

UIDの前田圭介氏とのコラボレーションによる「アトリエ・ビスクドール」や、「群峰の森」では、透明感のある開口部ディテールに内外連続した砂利や植栽があいまって、建物の内外の境界が曖昧になっている。その一方、壁や屋根の水平、垂直に屈曲した樹形の高木が絡み合うことにより、建築の構築性を際立たせている。

ハウスメーカーとのコラボレーションでは、街区全体を森に見立て、緑が敷地境界を超えて繋がっていく計画を提案している。境界にはフェンスやブロックなどは無い。法規上、建物は境界を超える事はできないが、植物にはそれが可能だ。

建築と造園の両方に探究心を持って学んで来た氏だからこそ持ち得た、ノリシロの様な太い境界によるコラボレーションが、造園のみならず建築の世界にも新たな風を起こしていると感じた。

聞き手 岡村吉展 (大林組)
写真撮影 河合止揚

①特別展 ギヤマン展—あこがれの輸入ガラスと日本—

江戸時代後期、ヨーロッパから輸入された上質のガラス器は、日本製の一般的なガラスを指すビイドロと区別して、ギヤマンと呼ばれた。ギヤマンという言葉は、ポルトガル語のダイヤモンドを意味するディアマンティ(Diamante)に由来する。ダイヤモンドのような透明を持ち、器面にカットがほどこされるなど華麗なきらめきを放つ輸入ガラス器が、日本人を魅了し、この上ない宝物として珍重されたことは、その伝来状況、手厚い収納状態から推しはかることができる。江戸時代後期から明治時代前期にかけて上方、江戸、薩摩などでさかに行われた手彫り切子は、高価で上質のギヤマンへの憧れから誕生したものにはかならない。これら日本で製作された切子は輸入品と区別して和製ギヤマンと呼ばれる。本展は、桃山から江戸時代、そして明治時代前期に日本にもたらされたヨーロッパ製ガラスの実像に迫り、その日本への影響にも目を向ける日本で初めての展覧会。17世紀のヴェネツィア系ガラスから18・19世紀のオランダ、イギリスの金彩、カットガラス、そしてその影響を受けた和ガラスまで、約180点を通して、ギヤマンの世界を紹介する。

期 間 9月15日(月・祝)まで
9:30~17:30 土曜日は19:00まで
(入館は閉館30分前まで)
休館日 月曜日、(9/15は開館)
会 場 神戸市立博物館
神戸市中央区京町24番地
TEL.078-391-0035
観覧料 一般1,000円、高大生700円、
小中学生400円



《金彩花卉文付きガラス瓶、脚付きガラス杯セット》19世紀前半期 中部ヨーロッパ製 長崎歴史文化博物館蔵

②阪神・淡路大震災20年展 宝塚歌劇100周年記念 宝塚歌劇100年展—夢、かがやきつづけて—

宝塚歌劇の歴史は、明治43(1910)年の箕面有馬電気軌道開通を契機につくられた娯楽施設、宝塚新温泉場に設けられた劇場で、大正3(1914)年の宝塚少女歌劇公演に始まる。創設者の小林一三(1873-1957)が提唱した「新しい国民劇の創成」という理念のもと、宝塚歌劇はオペラ、レビュー、歌舞伎、新劇など様々な要素を採り入れながら独創的な世界を開いてきた。戦争や災害など様々な困難を乗り越え、多くのスターを生み出し、「ベルサイユのばら」「風と共に去りぬ」など空前のヒット作を生み、国民的エンターテインメントとしての地位を確立した現在でも、タカラヅカは常に新たな可能性に挑み、さらなる変貌と進化を遂げようとしている。本展では、華やかな舞台で人々を楽しませ、独自の演劇文化を築いてきた宝塚歌劇の100年を、多彩な資料、美術作品、舞台装置等により様々な観点から紹介する。

期 間 8月5日(火)~9月28日(日)
10:00~18:00 金・土曜日は20:00まで
(入場は閉館30分前まで)
休館日 月曜日(9/15は開館)、9/16
会 場 兵庫県立美術館
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
TEL.078-262-0901
観覧料 一般1,300円、大学生900円、
高校生・65歳以上650円、
中学生以下無料



小倉遊亀《コーちゃんの休日》1960(昭和35)年 東京都現代美術館

③デュフィ展

ラウル・デュフィ(1877-1953)は、ピカソやマティスなどとともに、20世紀前半にフランスで活躍した画家。パリ万国博覧会の装飾壁画《電気の子》に代表されるような、明るい色彩と軽快な筆さばきで、独自のスタイルを築いた。本展覧会は、デュフィが故郷のル・アーヴルからパリに出て国立美術学校に入学する1899年から晩年に至るまでを紹介する回顧展。デュフィの重要なコレクションを

有するヨーロッパの美術館から、油絵画の代表作をはじめ、これまで日本ではあまり紹介されることのなかった版画やテキスタイル、陶器、家具など、多彩な約150点を紹介する。

期 間 8月5日(火)~9月28日(日)
火~金/10:00~20:00
土日祝/10:00~18:00
(入館は閉館30分前まで)
休館日 月曜日(9/15は開館)
会 場 あべのハルカス美術館
大阪市阿倍野区阿倍野筋1-1-43
あべのハルカス16F
TEL.06-4399-9050
観覧料 一般1,400円、大生1,000円、
小中生500円



《ヴァイオリンのある静物：バッハへのオマージュ》1952年 油彩、カンヴァス
パリ国立近代美術館、ボンピドゥー・センター
©Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais/Jean-Claude Planchet/distributed by AMF

④2014イタリア・ボローニャ国際絵本原画展

「イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」は、世界で唯一の子どもの本専門の国際見本市、ボローニャ・ブックフェアに併設された絵本原画のコンクール展入選作品で構成される。5点1組にしたイラストを用意すれば誰でも応募できる公募展で、すでに絵本として発表された作品も未発表のものも全て平等に審査される。多様な作品が集まり、今日の世界の絵本の動向を知ることが出来る展覧会として知られている。今年は59カ国3190名が応募、その中から日本人15名を含む23カ国75名の作家が入選した。特別展示では、昨年第4回ボローニャSM出版賞を受賞した刀根里衣の受賞作絵本「びっぼのたび」全原画18点と、これまで出版された絵本の中から18点の計36点を紹介。さらに、今年ボローニャ近代美術館で展覧会を開催し高い評価を得た、三浦太郎の新作を展示する。

期 間 8月23日(土)~9月28日(日)
10:00~17:00 金曜日は19:00まで
(入場は閉館30分前まで)

休館日 水曜日
 会場 西宮市大谷記念美術館
 西宮市中浜町4-38
 TEL.0798-33-0164
 観覧料 一般800円、高大生600円
 小中学生400円



《わたしの公園》マノン・ゴチエ（カナダ）

⑤宇宙兄弟展

UFOを目撃したことをきっかけに、ともに宇宙を目指そうと約束した兄弟。その19年後、弟・日々人は見事に宇宙飛行士となり夢を叶え、兄・六太は弟を悪く言った上司に頭突きし、会社をクビになっていた。兄は弟に背中を押され、幼い頃の夢に30歳を超えてから再挑戦するが……。六太と日々人、そして二人をとりまく仲間が織り成すストーリーが人気を集めた漫画『宇宙兄弟』。2008年に雑誌『モーニング』にて連載が始まり、2011年には小学館漫画賞、講談社漫画賞を受賞、累計発行部数が1400万部を超えるなど注目を集めてきた。初の大規模作品展となる本展では、迫力の原画を貴重な各種資料とともに6つのコーナーで公開。作品と宇宙の魅力を余すところなく伝える。



©小山宙哉／講談社

期間 9月23日(火・祝)まで
 10:00～18:00 金曜日は19:30まで
 (入場はそれぞれ30分前まで)
 休館日 月曜日(9/15、9/22は開館)、9/16

会場 京都文化博物館
 京都市中京区三条高倉
 TEL.075-222-0888
 観覧料 一般1,000円、高大生700円、
 小中学生400円

⑥特別展 こども展 名画にみる こどもと画家の絆

本展はパリ・オランジュリー美術館で開催された展覧会“Les enfants modèles”（「モデルとなった子どもたち」と「模範的な子どもたち」のダブルネーミング）を日本向けに再構成したもの。テーマは描かれた側＝モデルとなった子どもの体験と、描いた側＝子どもたちの親、または子どもたちと親しい関係にあった画家の想い。子どもたちの目線を通じて作品に秘められたメッセージやエピソードを読み解くという、絵画の新しい鑑賞方法を提案する画期的な展覧会となる。マティス、ピカソを始めとする18～20世紀の主にフランスで活躍した画家たち47人による、日本初公開を含む86点の作品が展覧される。これらの作品を通じて、「描く側＝大人」たちは何を残そうとし、「描かれる側＝子ども」たちは当時何を想ったのか。肖像画の変遷と時代の変化を辿りながら、作品に秘められた両者の想いに迫る。

期間 10月13日(月・祝)まで
 9:30～17:00 (入館は16:30まで)
 休館日 月曜日(9/15、10/13は開館) 9/16
 会場 大阪市立美術館
 大阪市天王寺区茶臼山町1-82
 (天王寺公園内)
 TEL.06-4301-7285 (なにわコール)
 観覧料 一般1,500円、高大生1,000円、
 中学生以下・障がい者手帳等持参無料
 (要証明)



アンリ・ルソー《人形を抱く子ども》1904-05年頃
 オランジュリー美術館
 ©RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) /
 Franck Raux/distributed by AMF-DNPartcom

▶医療福祉建築賞2014 募集

医療福祉建築賞は優れた医療福祉建築を顕彰し、広く世に知らせることによって、これら施設の質の向上をはかることを目的とする。優れた医療福祉建築とは、建築として質が高いことに加えて、利用者ならびに職員にとって快適で使い勝手がよいことを条件とする。

●対象

2011年4月1日から2013年3月31日までの2年間に日本国内において新築、増改築または改修を行なった医療・福祉・保健施設ならびにその関連施設とする。

●応募資格

当該施設の開設者または管理者、設計者のどちらでもよい。ただし、選考委員または委員の所属する組織が計画・設計・運営に関与している施設は応募できない(当該施設は委員の任期終了後に応募することができる)。

●選考のための提出資料

- (1) 所定の応募申込書ならびに建築概要書
- (2) 設計主旨
- (3) 図面 配置図・平面図・断面図など、大きさはA3判。
- (4) 写真15葉程度とし、周辺環境がわかるものを含むこと。また、室内については家具・機器等が設置されていること。大きさは任意。

上記(1)～(4)をA3判クリアファイル1冊におさめて提出のこと。なお、それらをPDF化しCD等に収めたデータを同時に提出。

●応募期日

2014年8月18日から同年8月29日まで。
 当日消印有効。

●提出先

一般社団法人 日本医療福祉建築協会
 住 所 〒108-0014 東京都港区芝5-26-20
 建築会館

TEL.03-3453-9904 FAX.03-3453-7573

●応募料

応募者は1作品につき64,800円(税込)を応募料として応募時に納入。

●公表

選考の結果は2015年3月末日までに応募者に通知するとともに別途本会会誌に公表する。

●問い合わせ

E-mail: office@jiha.sakura.ne.jpまで。
 詳細は下記サイトを参照。応募書類はダウンロードできる。
<http://www.jiha.jp>

本欄掲載の①～⑥の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手(82円)を日本建築協会事務局までお送りください。

総会

定時総会

- 6月18日(水) 15:00~15:40
議 事 (1) 平成25年度事業報告
(2) 平成25年度収支決算報告
(3) 公益目的支出計画実施報告
(4) 平成26年度事業計画
(5) 平成26年度収支予算
(6) 役員(理事、監事)候補者選任

理事会

第1回通常理事会

- 6月18日(水) 14:00~14:45
議 事 定時総会と同じ

第1回臨時理事会

- 6月18日(水) 16:03~16:10
議 事 (1) 会長選任
(2) 役付役員選任
(3) 常任理事ならびに常設委員
長委嘱
(4) 理事の会務分掌

評議員会

- 6月9日(月) 15:00~15:40
OMM2階6号会議室
議 事 (1) 評議員会議長互選
(2) 役員(理事、監事)候補者推薦
報 告 平成25年度事業報告他

編集委員会

第3回編集・広告企画合同委員会

- 6月11日(水) 17:30~18:50
議 事 (1) 特集号の企画
(2) 広告依頼先検討

第1回計画系分科会

- 6月13日(金) 19:00~21:20
議 事 (1) 幹事の選出
(2) 1月号特集の企画

第2回計画系分科会

- 6月30日(月) 19:00~21:10
議 事 (1) 1月号特集の企画
(2) 委員の増員検討

第1回インテリア・住宅系分科会

- 6月23日(月) 19:00~20:30
議 事 (1) 2015年2月号特集の企画

第3回構造分科会

- 6月6日(金) 18:00~19:30
議 事 (1) 構造の頁の企画
(2) 11月号特集の企画

第3回施工材料分科会

- 6月10日(火) 17:00~18:00
議 事 (1) 10月号特集の企画

第3回法令分科会

- 6月11日(水) 15:00~17:00
議 事 (1) 法令コーナーの企画
(2) 9月号特集の企画

第3回作品作風小委員会

- 6月26日(木) 19:00~19:40
議 事 (1) 作品の選定
(2) 作品の掲載状況、掲載予定
の報告
(3) gallery掲載報告・予定・校正

事業委員会

第3回U-35小委員会

- 6月13日(金) 19:00~22:00
議 事 2nd actionの企画検討

出版委員会

第3回出版委員会

- 6月26日(木) 18:00~19:15
議 事 (1) 進行中のテーマについて
(2) 新テーマについて

100周年関連事業委員会

第59回群像(インタビュー)

- 6月2日(月) 16:00~18:00
インタビュー 柳々堂書店 松村智子

第60回群像(インタビュー)

- 6月9日(月) 11:00~12:30
インタビュー 荻野寿也 景観設計
荻野寿也

第1回史料研究会(再読関西近代建築)

- 6月3日(火) 18:00~19:30
議 事 (1) 今後の連載企画の検討
(2) 「100年史」等の刊行
(3) 協会所蔵書籍のリスト

第3回10年委員会

- 6月5日(木) 18:30~20:00
議 事 (1) 学生のための見学会開催
(2) 大阪ええとこ創生プロジェ
クト・コンペ案検討

講演会

- 6月18日(水) 16:30~17:40
講 師 澤田 充
演 題 「旧(ふる)くからあるけれど新
しい大阪の魅力をもつ北船場。
街の活動を通して新しいコミュ
ニティを考える」

- 参加者 50名
6月27日(金) 19:00~22:00
講 師 高橋和也 木村美樹雄
橋本英樹 塚島 健
演 題 U-35委員会企画 2nd action
「建築と拡張」
参加者 79名

表彰式

- 6月18日(水) 17:50~18:45
表 彰 (1) 青年技術者表彰 26名
(2) 「建築と社会」賞表彰 論考
部門3作品、作品部門4作品

懇親会

- 6月18日(水) 18:55~20:20
参加者 110名

■訂正とお詫び

本誌2014年7月号に、下記の誤りがあり
ました。

再読 関西近代建築
ーモダンエイジの建築遺産ー

枚岡市庁舎(現・東大阪市旭町庁舎)
47頁、右段下から4行目

誤 西澤文隆(1929年滋賀生まれ)
正 西澤文隆(1915年滋賀生まれ)

関係各位にご迷惑をおかけしましたこと
をお詫び申し上げます。

編集委員会(平成26年度)

■副会長

- 設楽 貞樹
本多 友常

■編集担当理事

- 西 博康
押味 至一

■編集担当理事

- 佐藤 榮一
杉本 浩

■編集担当理事

- 竹中 統一
松本 眞一

■編集担当理事

- 吉村 英祐
◎米井 寛

■副委員長

- 勝山 太郎
■特集小委員会

■計画分科会

- ★計画系
飯田 匡

- 鈴木 克彦
△田中 直人

■法令分科会

- 紅谷 昇平
松田奈緒子

- 三宅 次郎
守井 辰

- 吉村 英祐
★建築計画系

- 荒木 宏之
大西 広朗

- 神戸 嘉也
静 茂夫

- 下坂 浩和
野田 隆史

- 橋本 祐典
三谷 帯介

- 矢野 展寛
米山 剛史

- △渡部 剛
★インテリア・住宅

- 今井 充彦
川合 隆之

- △黒柳 亮
酒井 雅男

- 塚口真佐子
ペリー史子

- 間瀬 一博
森岡 拓也

- 岡田 健
△岸本 光平

- 司馬 勢也
瀧野 敦夫

- 角田 耕一
橋本 宗明

- 松村 健
宮久保秀樹

- 向井 洋一
◎委員長 ○副委員長

- ▲小委員会委員長 △幹事
(順不同)

- 赤澤 正治
大石 晶彦

- 北野 勝也
樺田 輝生

- 寺井 千佳
長澤 康弘

- 夏井 重行
野崎 正二

- △橋本 直樹
榊井 貴廣

- 宮崎ひろ志
村上幸三郎

- 施工材料分科会

- 荻原 友貴

- 後藤 尉彦

- 桜井 和男

- 高橋 秀一

- △中野 敬史

- 藤丸 啓一

- 法令分科会

- 井上 久明

- △岡本 亮二

- 河野 学

- 田中 幸夫

- 前田 俊文

- 吉岡 忠

- 作品作風小委員会

- 居内 章夫

- 池上 明

- 稲垣 和江

- 東井 嘉信

- 加嶋 章博

- 菊池 浩輔

- 倉橋 尉仁

- 倉淵奈千子

- 澤田 純一

- 鞆野 淳司

- 豊田 充広

- 鳥居 久人

- ▲西田 佳代

- 芳谷 晴彦

- 増田 敬彦

- 広告企画小委員会

- 大谷 金由

- 小川 雄介

- 小山 昭

- 権代 晃

- 藤田 昌宏

- ▲前田 衛

- 山辻 直樹

印刷 2014年7月29日

発行 2014年8月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪府中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 ㈱中島弘文堂印刷所

定価 1230円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます。

電気工事・空調工事・水道衛生工事・消防施設工事
および機械器具設置工事の設計、監理、施工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号 電話 (06) 6441-8231
東京本社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号 電話 (03) 3261-8231
支店 札幌・仙台・新潟・さいたま・横浜・豊田・金沢・京都・神戸・天理・岡山・
広島・高松・熊本
営業所 帯広・函館・青森・秋田・盛岡・福島・山形・前橋・宇都宮・土浦・千葉・
長野・松本・静岡・刈谷・津・岐阜・富山・福井・和歌山・東近江・山口・
松江・松山・高知・徳島・宮若・鳥栖・長崎・大分・宮崎・鹿児島・那覇
海外支店 シンガポール・ホンコン・マニラ (フィリピン)・ベタリンジャヤ (マレーシア)
技術研究所 〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地 電話 (0492) 58-1511

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧にに対応できるように

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 **中島弘文堂印刷所**

本社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765
東京事務所 〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1丁目9番地ニュー御茶ノ水ビル601号
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理
株式会社 **日本電気化学工業所**

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

コンクリートのひび割れ対策に

NETIS 登録済み
KT-040018-V

DENKA
DENKI KAGAKU KOGYO KABUSHIKI KAISHA

高性能膨張材

デニカパワーCSA

JIS A 6202
適合品

特 性

- ・乾燥収縮の低減
- ・自己収縮の低減
- ・水密性の向上(防水性)
- ・温度ひび割れの低減

主な用途例

- ・合成デッキスラブ
- ・土間スラブ
- ・RC 構造物
- ・自己充填コンクリート
- ・マスコンクリート 他

膨張材以外にも

- ・無収縮グラウト材
(タスコン)
 - ・躯体防水材
(シャガード)
 - ・ポリマーセメントモルタル
(RIS シリーズ)
- など、各種混和材(剤)を
ラインナップしています。

●資料のご請求お問い合わせは・・・

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社 本社
〒629-3101 京都府京丹後市網野町網野 126
TEL 0772-72-2220 FAX 0772-72-2888
舞鶴営業所・福知山営業所・豊岡営業所

小浦産業株式会社

〒550-0004 大阪府大阪市西区靱本町1丁目14番6号
TEL 06-6443-6181 FAX 06-6443-6270

人がつくる。人でつくる。

ここで過ごす人々の姿を、
ここからはじまるしあわせをイメージしながら。

アイデアでつくろう。情熱でつくろう。
さまざまな人の想いをつないでつくろう。
アタマとココロを使って
人間にしかできないものづくりを目指して。

人がつくる。人でつくる。
それが戸田建設のやりかたです。

 戸田建設



www.toda.co.jp 本社 〒104-8388 東京都中央区京橋1-7-1 ☎03-3535-1354


ISO 9001・14001認証取得